高崎城遺跡21

前橋地家裁高崎支部庁舎耐震改修等工事に伴う
埋　蔵　文　化　財　発　掘　調　査　報　告　書

2013

東　京　高　等　裁　判　所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

高崎城遺跡21

前橋地家裁高崎支部庁舎耐震改修等工事に伴う
埋　蔵　文　化　財　発　掘　調　査　報　告　書

2013

東　京　高　等　裁　判　所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

1　２区-①東側で検出した埋門南堀南岸の状況と陶磁器出土状態。地山の右手に深く掘り込まれた堀の断面が見える。陶磁器はくぼみに投げ込まれたか、穴を掘って埋められた。

2　出土陶磁器の多くは、東京鎮台高崎分営 (～明治 17 年) の時期に使われたらしい。

序

前橋地方家庭裁判所高崎支部は、平成23年度に耐震補強等の工事が計画されました。東京高等裁判所の依頼により群馬県教育委員会文化財保護課が試掘調査を実施したところ、高崎城本丸の東側に位置する梅ノ木郭南側の堀に相当することが確認されたことから、当事業団が平成24年度に本調査を実施することとなりました。

高崎城は慶長３年(1598年)、井伊直政が幕命により築いた城で、戦国期の和田城を取り込み、烏川の東側崖上に築かれ、三重の堀に囲まれていました。

今回の発掘調査区域は、現在の前橋地方家庭裁判所高崎支部庁舎の南側に位置し、絵図等を参考にすると、高崎城中枢部の本丸東側に連なる梅ノ木郭の南辺に設置された、埋門と呼ばれた門の南側堀の南岸付近と推定されます。

調査区域はごく狭い範囲でしたが、梅ノ木郭の一部を明らかにでき、今後、高崎城の往時の姿を解明できる貴重な資料を提供したと思われます。

調査に際しては、東京高等裁判所、前橋地方家庭裁判所高崎支部、群馬県教育委員会、地元高崎市教育委員会ほかの関係各機関の御協力に厚く感謝申し上げるとともに、本書が活用されることを願って序とします。

平成25年９月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理　事　長　　上　原　訓　幸

例　言

1　本書は、前橋地家裁高崎支部庁舎耐震改修等工事に伴う、高崎城遺跡の発掘調査報告書である。書名「高崎城遺跡21」の「21」は調査次数を表し、この表記は群馬県教育委員会文化財保護課と高崎市教育委員会文化財保護課の協議により調整されたものである。

2　本書に掲載した高崎城(たかさきじょう)遺跡は、群馬県高崎市高松町26番地2に所在する。
調査対象面積は、293㎡である。

3　事業主体　東京高等裁判所(前橋地家裁高崎支部)

4　調査主体　公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

5　調査期間　平成24年５月１日～平成24年５月31日

6　調査体制は次のとおりである。

調査担当　　齊藤利昭(上席専門員)
遺跡掘削請負工事　スナガ環境測設株式会社
委託　地上測量　　アコン測量設計株式会社

7　整理事業の体制・期間は次のとおりである。

平成25年度　　整理期間　平成25年７月１日～平成25年７月31日
　　整理担当　関　晴彦(専門調査役)

8　本書作成の担当は次のとおりである。

編集　　関　晴彦(専門調査役)　　デジタル編集　齊田智彦(主任調査研究員)
執筆　　第１章　　坂口　一(資料課長)
　　近世遺物観察表・第５章第１節出土陶磁器所見　大西雅広(上席専門員)
　　金属製品観察表　関　邦一(補佐(総括))、他は関
遺物写真撮影　　佐藤元彦(補佐(総括))
保存処理　　関　邦一(補佐(総括))

9　出土遺物及び発掘調査に係わる資料は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

10　発掘調査並びに整理作業にあたり、下記の諸機関、諸氏にご教示、ご協力をいただいた。記して御礼申し上げます。
(敬称略)　前橋地家裁高崎支部、群馬県教育委員会、高崎市教育委員会、清水　豊、秋本太郎

凡　例

1　本報告書の座標値は、世界測地系第IX系である。１区北西隅付近の座標値は、次の通りである。

X=36224.767

Y=-74698.248

2　挿図中に示す方位記号は、座標北を示す。真北方向角は+0度29分33秒である。

3　本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。

第１図　高崎市都市計画図　昭和54年版に加筆。

第３図　国土地理院1/25,000地形図「下室田」平成14年版、「前橋」平成９年版、「富岡」平成６年版、「高崎」平成14年版

第４図　高崎市都市計画図　昭和54年版に、１～19次の調査区域を加筆。

第20図　『高崎市史資料集１　高崎城絵図』平成18年、１頁に加筆。

第21図　「No.17　御城破損之場所御願絵図」『高崎市史資料集１　高崎城絵図』平成18年、17頁の一部に加筆。

第22図　「No.40　チリ防木こく今度植候所絵図上ル控」『高崎市史資料集１　高崎城絵図』平成18年、45頁の一部に加筆。

第23図　『第一軍管地方迅速測図』「高崎」の一部に加筆。

第24図　『高崎城Ｘ　高崎城梅ノ木郭遺跡』　高崎市遺跡調査会,1993、10頁に加筆。

4　本文中の火山噴出物(テフラ)の表記は、以下のとおりである。

As-A:浅間山Ａ軽石	1783(天明３)年
As-B:浅間山Ｂ軽石	1108(天仁元)年
高崎泥流	1.1万年前頃
As-YP:浅間山板鼻黄色軽石	1.3万年前頃

目　次

口絵
序
例言
凡例
第１章　調査に至る経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第２章　調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
　　　　第１節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
　　　　第２節　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第３章　遺跡の位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
　　　　第１節　遺跡の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
　　　　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
第４章　検出された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
　　　　第１節　概要・・ 8
　　　　第２節　１区の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
　　　　第３節　２区の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
　　　　第４節　３区の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
　　　　第５節　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　　　　遺物観察表・・25
第５章　調査の成果とまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
　　　　第１節　出土陶磁器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
　　　　第２節　埋門・・32
写真図版
抄録

挿図目次

第１図　前橋地方家庭裁判所高崎支部の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第２図　調査区の配置 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
第３図　調査地点の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
第４図　高崎城の既調査地点 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
第５図　１面全体図・２面全体図及び１区２面・・・・・・・・・・・・・・ 9
第６図　２区土層断面 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
第７図　２区-①２面東側(埋門付近)平面図・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
第８図　３区２面 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
第９図　出土遺物(１)陶磁器１～13 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
第10図　出土遺物(２)陶磁器14～25 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
第11図　出土遺物(３)陶磁器26～37 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
第12図　出土遺物(４)陶磁器38～46 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
第13図　出土遺物(５)陶磁器47～55 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
第14図　出土遺物(６)陶磁器56～64 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
第15図　出土遺物(７)陶磁器65～73 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
第16図　出土遺物(８)陶磁器74～82 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
第17図　出土遺物(９)陶磁器83～89 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
第18図　出土遺物(10)瓦・陶磁器90～95 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
第19図　出土遺物(11)金属製品96～101・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
第20図　高崎城　梅ノ木郭の位置 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
『高崎市史資料集１　高崎城絵図』平成18（2006)年、1頁に加筆。
第21図　高崎城　梅ノ木郭　埋門の位置(１)・・・・・・・・・・・・・・・ 34
「No.17　御城破損之場所御願絵図」享保12年９月
『高崎市史資料集１　高崎城絵図』平成18（2006)年、17頁の一部に加筆。
第22図　高崎城　梅ノ木郭　埋門の位置(２)・・・・・・・・・・・・・・・ 34
「No.40　チリ防木こく今度植候所絵図上ル控」享保６年９月27日
『高崎市史資料集１　高崎城絵図』平成18（2006)年、45頁に加筆。
第23図　明治18年の高崎城跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
『第一軍管地方迅速測図』「高崎」の一部に加筆。
第24図　高崎城第10次調査の調査区域 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
『高崎城Ｘ　高崎城梅ノ木郭遺跡』高崎市遺跡調査会、1993、10頁に加筆。

表目次

第１表　高崎城遺跡調査一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
第２表　遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25

写真目次

PL．1　１区全景　北から
　　１区全景　東から
PL．2　１区全景　北から
　　１区　基本土層断面a-b　南から
　　２区-①全景　北から
　　２区-①西側全景　西から
　　２区-①東側全景　東から
PL．3　２区-①西側堀内　西壁基本土層断面a-b　東から
　　２区-①東側　北西から
　　２区-①東側堀内　土層断面g-h　東から
　　２区-①東側埋門南堀上層　遺物出土状態　北から
PL．4　２区-②煉瓦とコンクリートの基礎１　東から
　　２区-②煉瓦とコンクリートの基礎２　西から
　　２区-①東側　梅ノ木郭埋門南堀南側　北から
　　２区-①東側　梅ノ木郭埋門南堀南側　北東から
　　２区-①東側　梅ノ木郭埋門南堀南側　北西から
PL．5　２区-①　北壁基本土層断面c-d　南から
　　２区-①東側　梅ノ木郭埋門南堀　北東から
　　２区-②トレンチ　西から
　　２区-②トレンチ　南壁基本土層断面e-f　北から
　　２区-①東側　梅ノ木郭埋門南堀１　北から
　　２区-①東側　梅ノ木郭埋門南堀２　北から
　　２区-①東側掘削底面　杭出土状態　東から
PL．6　２区-①東側　木杭・石出土状態　東から
PL．7　３区全景　東上空から
　　３区全景　西上空から
　　３区全景　東から
　　３区全景　西から
　　３区全景　北から
　　３区　西壁土層断面c-d　東から
PL．8　２区埋門南堀　出土遺物- 1
PL．9　２区埋門南堀　出土遺物- 2
PL．10　２区埋門南堀　出土遺物- 3
PL．11　２区埋門南堀　出土遺物- 4
PL．12　２区埋門南堀　出土遺物- 5
PL．13　２区埋門南堀　出土遺物- 6
PL．14　２区埋門南堀　出土遺物- 7
PL．15　２区埋門南堀　出土遺物- ８、１区出土遺物
PL．16　２区出土　金属製品・木杭

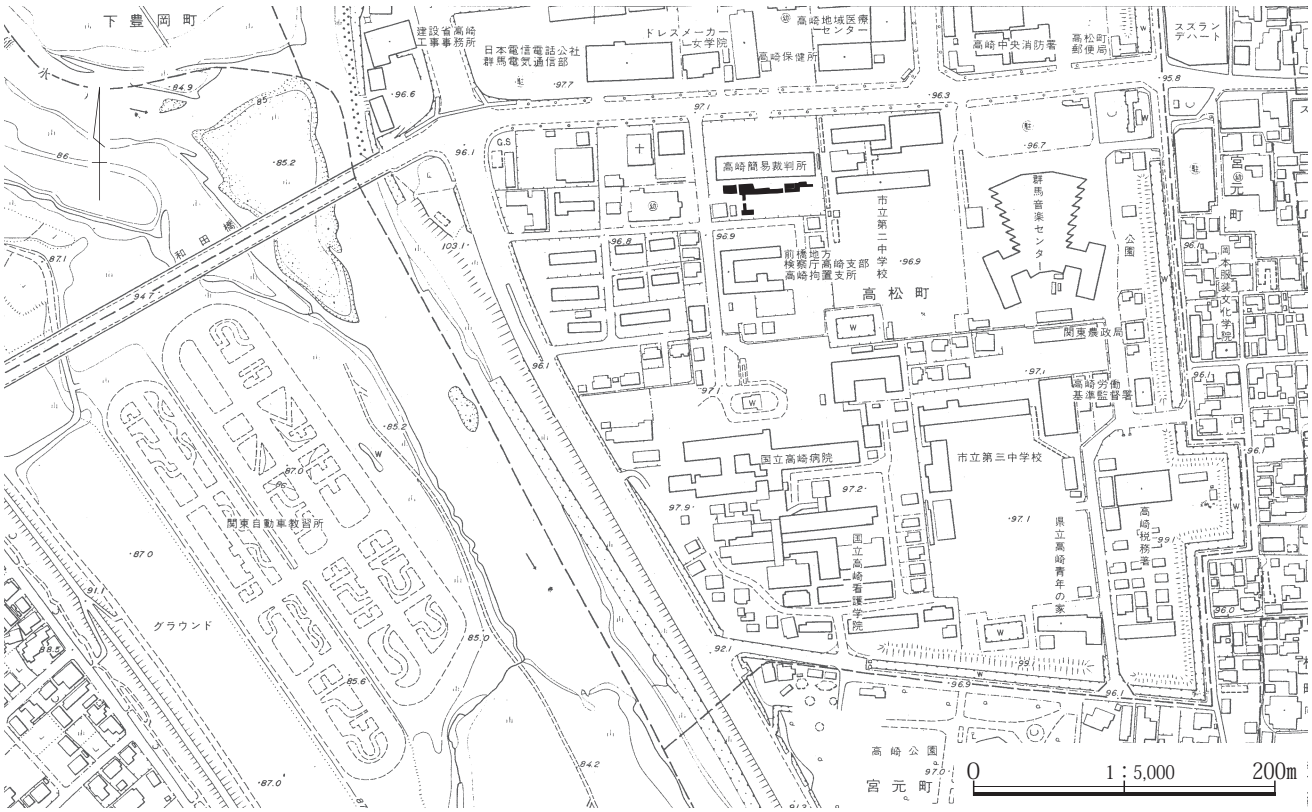
第１章　調査に至る経過

高崎城遺跡の発掘調査は、平成24年度前橋地家裁高崎支部庁舎耐震改修等工事に伴う事前の発掘調査である。平成23年12月５日、事業主体者である東京高等裁判所から群馬県教育委員会文化財保護課へ、同工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の試掘依頼があった。この依頼に対して、本事業地が周知の埋蔵文化財包蔵地(高崎市遺跡番号02335：高松30遺跡)内にあることから、平成23年12月８日～９日、群馬県教育委員会文化財保護課による試掘調査が実施された。この試掘調査の結果、地表面下40cmの深さで煉瓦積みの近代遺構が確認されるとともに、地表面下80 ～ 110cmの深さで堀の覆土が確認された。

この堀跡の位置を高崎城縄張図と照合したところ、高崎城本丸の東側に位置する梅ノ木郭を囲む堀の南辺側の堀であることが確認され、さらにこの堀に付随する張出状の埋門に関連する造作の存在も予想された。このことから、本事業地については本調査が必要で、調査期間は平成24年５月１日～平成24年５月31日の１か月間との判断が下された。

この県文化財保護課による試掘調査結果と調整を受けて、平成24年２月16日に東京高等裁判所、県文化財保護課、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、耐震改修工事を受注した施工業者の四者で、発掘調査に係わる事前の具体的な方法の協議が行われた。一方、平成24年４月11日、東京高等裁判所から県文化財保護課へ同事業地の発掘調査の依頼があり、同課による発掘調査の調整が行われた。

この調整結果に基づいて、平成24年４月17日、再び東京高等裁判所、県文化財保護課、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の三者で、発掘調査に係わる具体的な方法の協議が行われ、東京高等裁判所と公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で、平成24年５月１日付けの埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、同事業団で発掘調査を実施するに至った。



第１図　前橋地方家庭裁判所高崎支部の調査(黒塗り)

第２章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

１　記録

調査対象区域の掘削可能範囲内で、舗装撤去及び工事境界杭の設置を施工業者が終了したのちに、重機を使用して１区から表土掘削を開始した。埋設物が多く存在することが予想されたため、慎重に掘削を進め、遺構確認ののち掘り下げて遺構状況を把握し、掘り下げ限界まで、その都度記録写真を撮影し、全体の状況が把握できた段階で全景写真を撮影した。また、平面測量を業者に委託して記録するとともに、土層の堆積状態の断面図を作成した。

写真記録

デジタルカメラ(1000万画素)によるカラー写真撮影。

６×７フィルムカメラ(ブローニーフィルム)によるモノクロ写真撮影。

図面記録

デジタル平板による平面図。原則として縮尺１/20。調査区域等の測量も含む。

手実測による断面図。原則として縮尺１/20。後日、デジタルトレースにより電子化。

２　調査区の設定

調査対象区域は、耐震設備設置個所及び受水槽移設先、配電ケーブル切り回し範囲を対象とした。第２図のように、全体を３つの区画に分け、さらに内部を分割して地区名称を付した。分割される工事箇所にそれぞれ次のような調査区名称を付けた。

１区:受水槽設置箇所

２区-①:西側耐震設備設置箇所

２区-②:埋設ケーブル敷設箇所

３区:東側耐震設備設置個所

第２節　調査の経過

１　日誌抄録

以下、日誌により調査経過を記す。

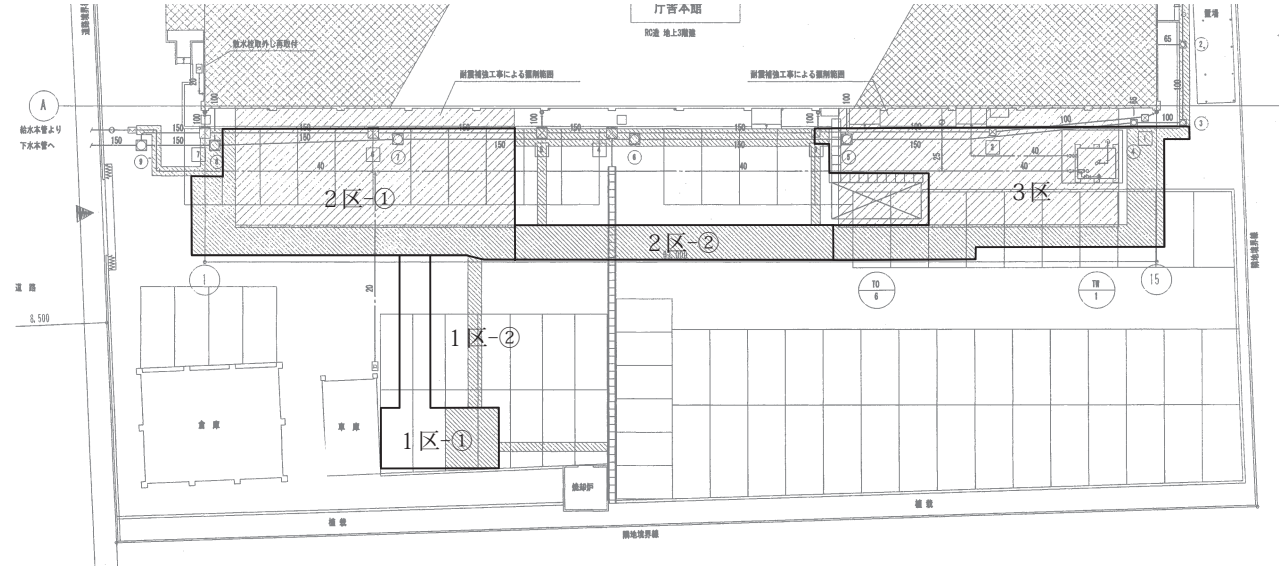
５月１日(火)　工事業者と打合せをする。請負掘削業者・重機業者と打ち合わせる。

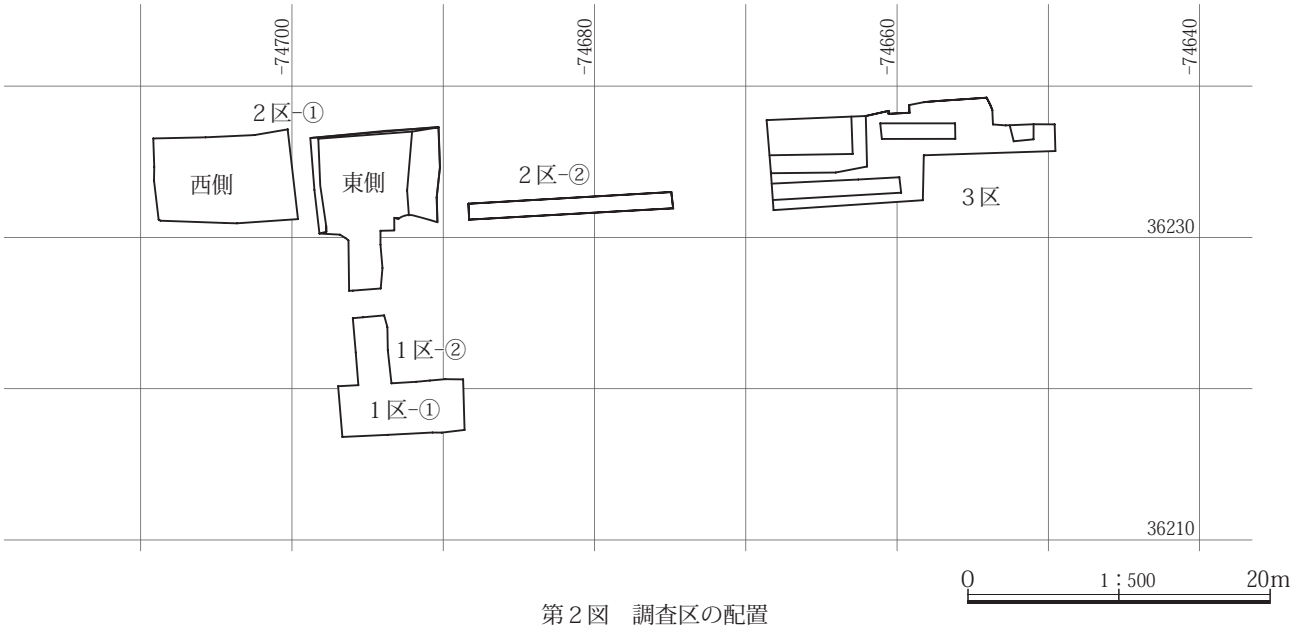
５月７日(月)　１区掘削を開始したが、撹乱が多く、遺構なし。２区-②掘削開始。

５月８日(火)　１区全景撮影。２区堀跡人力掘り下げを進める。

１区の表土掘削

２・３区の調査　東から





第２図　調査区の配置

２区-②の調査

土層断面図の作成

５月９日（水）　曇りのち雨。２区-①人力掘り下げを進める。堀跡南法面検出。

５月10日（木）　２区-①堀跡南法面埋没土中から陶磁器が出土する。２区-②重機掘削を進めたところ、煉瓦積み基礎を確認。

５月11日（金）　２区全景写真撮影。煉瓦積み基礎の測量。

５月14日（月）「埋門」精査。２区-②及び３区掘削。

５月15日（火）　雨。２区-①深く掘り下げて底面を探る。３区重機掘削を進める。

５月16日（水）　３区人力掘り下げ・遺構確認を進める。２区基本土層を記録する。

５月17日（木）　３区全景写真撮影。土層断面記録。調査ほぼ終了。埋め戻し準備。

第３章　遺跡の位置と歴史的環境

第１節　遺跡の位置

高崎城遺跡は旧高崎市街地中心部にあり、高崎台地と呼ばれる平坦な地形の西端に位置する。高崎台地は約21万年前に発生した浅間山の爆発に伴う前橋泥流と、約1.1万年前に発生した高崎泥流で形成され、その西端は烏川によって浸食された崖となっている。高崎城遺跡は烏川左岸の崖上にある。

北側-東側-南側の三方向を堀に囲まれた内部は、現在群馬音楽センターや市役所等の公共機関の建物が建ち並ぶ区域となっている。

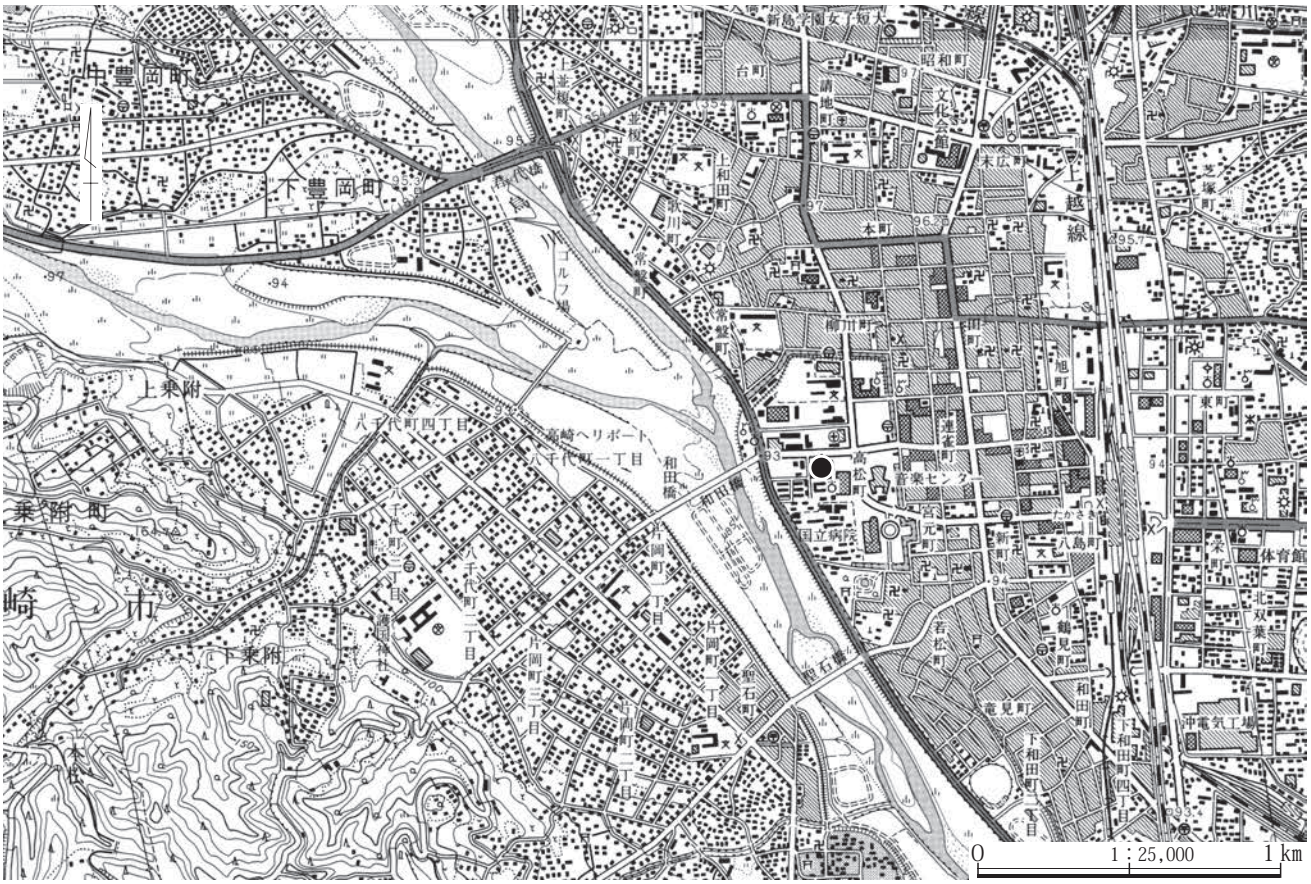
第２節　歴史的環境

旧高崎市の区域では、烏川左岸にある弥生時代中期後半の標識遺跡である竜見町遺跡や高崎競馬場遺跡が古くから知られ、近年では古墳時代～平安時代の遺構・遺物も発見されている。以下、明治維新以降の高崎城を中心に記す。

高崎城遺跡の範囲には、かつて中世には和田城があったことが記録されているが、具体的な城郭の様子は不明である。和田城は1598年(慶長３年)の高崎城築城によってその内部に取り込まれ、その一部が高崎城西郭とされてきた(山崎1978)。XV次調査で西郭が調査され、和田城櫓台とされていた盛土は、1582年(天正10年)以降の造成であると推定された。

明治維新後、

1871年(明治４年)　県庁となる。

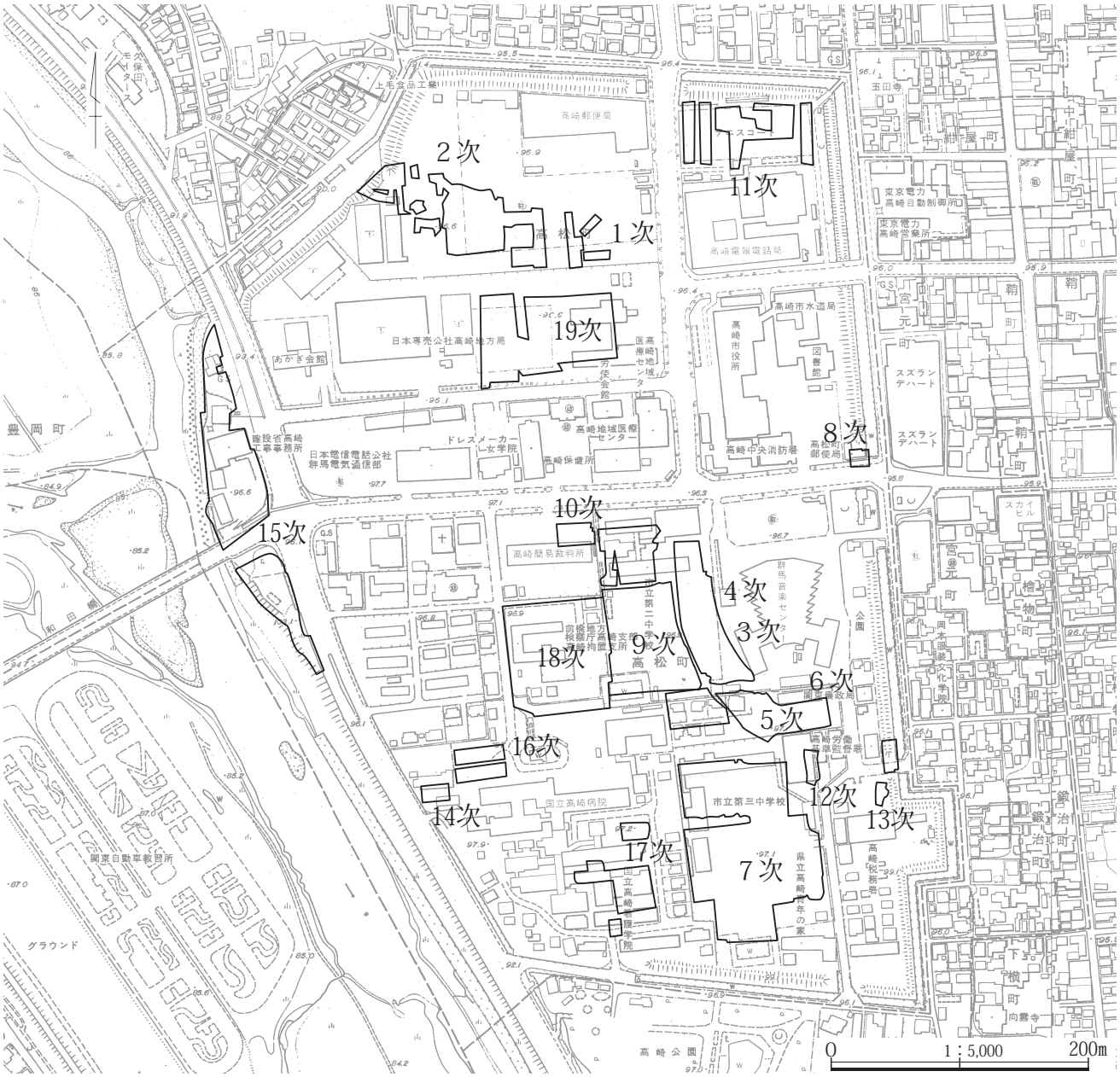


第３図　調査地点の位置

1872年(明治５年)　陸軍兵営となる。東京鎮台高崎分営設置。内堀が埋められる。
1875年(明治８年)　歩兵第三連隊第一大隊が置かれる。
1884年(明治17年)　歩兵第十五連隊が置かれる。
などの変遷を重ね、第二次大戦後は官公庁として利用され、現在もその利用状況が続いている。

ここでは、調査対象区域が高崎城遺跡の内部にあると想定されていることから、高崎城遺跡の調査歴を記して、今回の調査の位置付けの一助としたい。この調査一覧(第１表)は、『高崎城遺跡19』に掲載された一覧表の抜粋である。

[参考文献]
『群馬県史』資料編２,1986
『高崎城XV遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第369集,2006
山崎一『群馬県古城塁址の研究』下巻,群馬県文化事業振興会,1978
『高崎城遺跡19』高崎市教育委員会,2010



第４図　高崎城の既調査地点

第１表　　高崎城遺跡調査一覧

調査次	調査年	調査原因	文献
１次	昭和60年	高松中学校校舎建設	1
２次	昭和61年	高松中学校校庭築造	2
３次	昭和63年	都市計画道路高崎駅西口線築造	3
４次	昭和63年～平成元年	都市計画道路高崎駅西口線築造	3
５次	平成元年～２年	都市計画道路高崎駅西口線築造	3
６次	平成元年	群馬シンフォニーホール建設	4
７次	平成２年	高崎市役所新庁舎建設	5
８次	平成２年	高松郵便局建替	6
９次	平成３年	高崎市役所(高崎シティギャラリー)建設	5
10次	**平成３年**	**前橋地方家庭裁判所高崎支部構内建物増築**	**7**
11次	昭和63年	市営高松地下駐車場・友好姉妹都市公園建設	8
12次	平成５年	都市計画道路高松若松線改築	9
13次	平成５年	城址公園公衆便所建設	9
14次	平成８年	国立高崎病院(当時)研修棟建設	10
15次	平成14年	国道17号(高松立体)改築	11
16次	平成15年	国立高崎病院(当時)仮設病棟建設	12
17次	平成17年	国立病院機構高崎総合医療センター建設	13
18次	平成20 ～ 21年	高崎法務総合庁舎建設	
19次	平成20 ～ 21年	高崎市医療保険センター(仮称)・新図書館建設	14
20次	平成23年	前橋地方検察庁高崎法務総合庁舎建て替え工事	15
21次	**平成24年**	**前橋地方家庭裁判所高崎支部庁舎耐震改修等工事**	**本書**

[文献]　とくに記述のない限り、高崎市教育委員会による。
『群馬県史』資料編２,1986
1　『高崎城跡』,1985
2　『高崎城遺跡Ⅱ　榎郭並びに三ノ丸北西部』高崎市文化財調査報告書81集,1988
3　『高崎城遺跡Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ』高崎市107集,1990
4　『高崎城Ⅵ　三ノ丸遺跡』高崎市104集,1990
5　『高崎城Ⅶ・Ⅸ　高崎城三ノ丸遺跡』高崎市129集,1994
6　『高崎城Ⅷ(追手門)遺跡』高崎市121集,1992
7　『高崎城Ⅹ　高崎城梅ノ木郭遺跡』高崎市遺跡調査会,1993
8　『高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告書』高崎市93集,1989
9　『高崎城Ⅻ・ⅩⅢ』高崎市131集,1997
10　『高崎城ⅩⅣ遺跡』高崎市57集,1997
11　『高崎城ⅩⅤ遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第369集,2006
12　『高崎城ⅩⅥ遺跡』高崎市193集,2003
13　『高崎城ⅩⅦ遺跡』高崎市206集,2006
14　『高崎城遺跡19』高崎市259集,2010
15　『高崎城遺跡20』高崎市312集,2013

第４章　検出された遺構と遺物

第１節　概要

高崎城遺跡はもとNTT群馬支社付近を本丸とし、その東側に梅ノ木郭が連なり、両者を囲む内堀が巡っていたと推定されている。本丸の北側に榎郭、西側に西の丸があり、本丸の東側は二の丸となり、梅ノ木郭は二の丸の内側に相当する。二の丸を囲むように堀があり、その外側を三の丸が囲む。三の丸を囲む堀が、現在見られる堀で、土塁とその外側の水を湛えた堀が良く残っている。本丸を囲む堀、二の丸を囲む堀は埋められて、現在みることはできない。

今回の調査区域は本丸の東側に連なる梅ノ木郭の内部と、その南側にある堀の境界付近に相当する。梅ノ木郭は北側に梅ノ木門があって二の丸につながるが、南側に「埋門」と呼ばれる施設があり、通常は架橋されていないが必要な場合は跳ね橋または滑り出しの橋が架けられたと考えられる場所である。今回の調査では、堀跡と堀南側の埋門跡(基礎になる土台)を検出したと考えられる。

第２節　１区の調査(第５図、PL．１・２)

１区は調査対象区域の南端の区域である。地表下約20cmで基盤(地山と呼ぶ)となる高崎泥流が確認できた。１区ではビニールが入ったり、近代・現代の土管が埋設されていたりと、大半が撹乱されており、高崎城遺跡に関連する遺構は検出されず、記録をとって埋め戻した。

第３節　２区の調査(第５～７図､PL．２～６)

２区は西端部の２区-①と東側の２区-②とに分けられる。

１　２区-①西側

２区-①は既存の水道・電気等の配管のほか、用途不明の埋設管が表土下で確認され、部分的な調査に限られた。２区西端部では、部分的であるが梅ノ木郭南側の堀痕跡を検出した(第６図a-b)。最下層の５は黒色土で炭化物を多く含み、瓦片を多く含んでいた。

２　２区-①東側

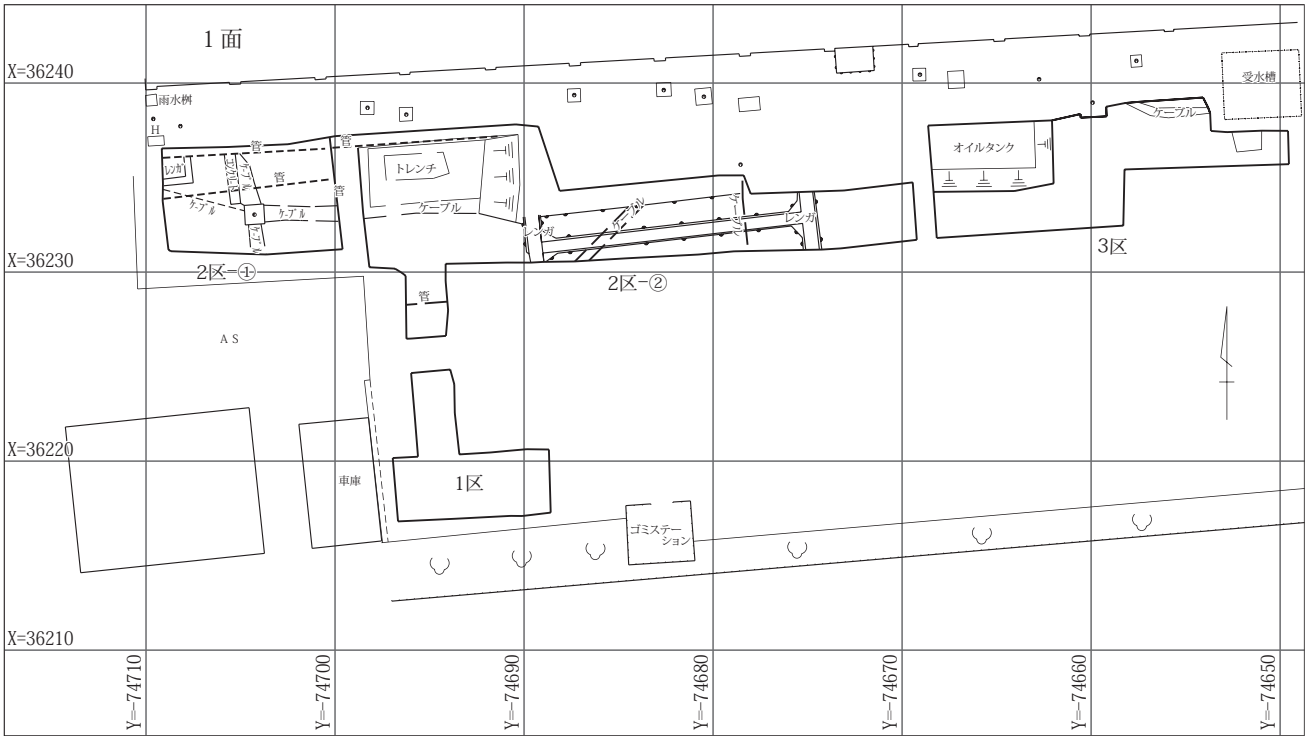
２区-①の東側(２区全体では中央部に相当する)では中央部にケーブルが敷設され、調査区域は南北に二分される状態となった。表土下には何枚もの薄く付き固められた版築土層がみられ、それらの中に旧陸軍第十五連隊関連の構築物が所々に認められたことから、堀の上に構築された建物の地盤強化を施した版築土と考えられる。

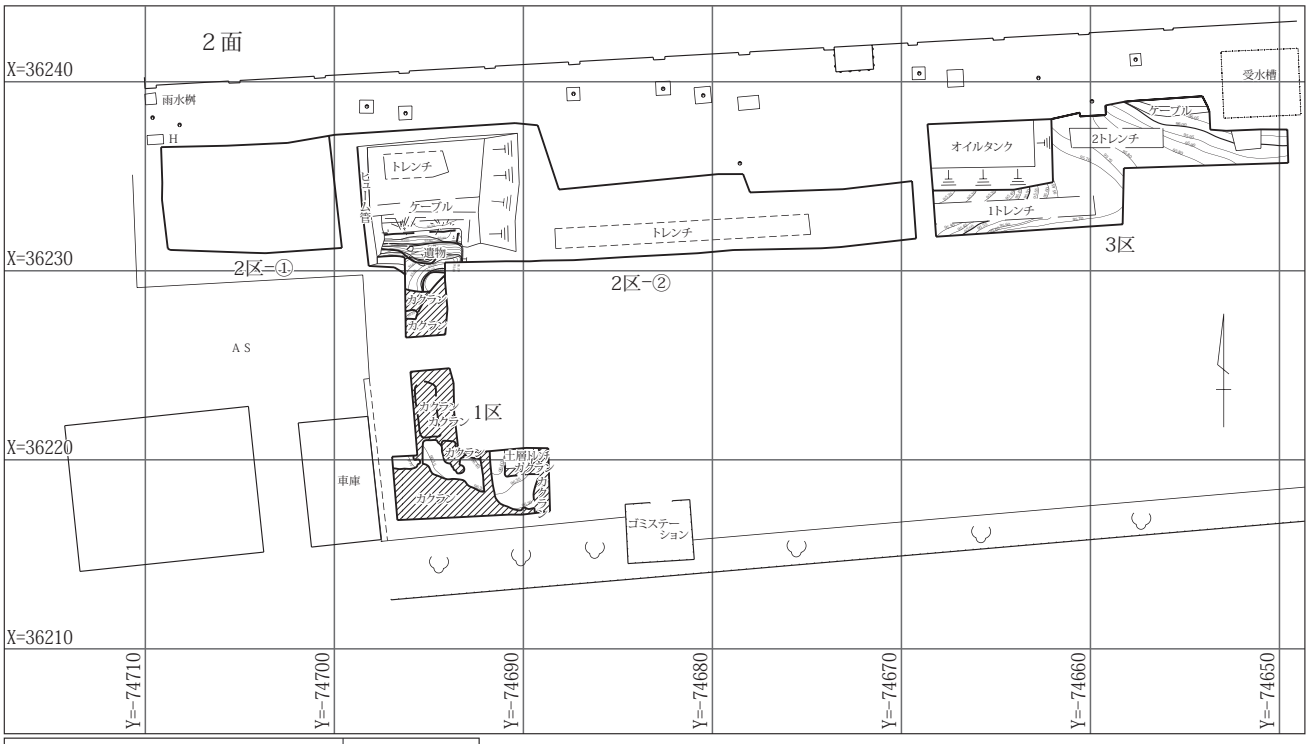
その下位の調査では、調査区域南端部で梅ノ木郭の縄張図にある張出部の立ち上がりとみられる地山面を検出した。埋没土には炭化物や基盤層の高崎泥流が混じる土が堆積し、埋没土中から明治時代の陶磁器がまとまって出土した。また、補足調査した埋門裾部からはガラス破片が出土し、明治期に堀の埋め立てが行われたことが判明した。

２区-①東側の本館寄りの区域にトレンチを設定して、堀の底面及び埋門北側張出部の確認を試みた。湧水があったことと、建物や作業の安全が確保できない可能性があり、堀底面の検出には至らなかった。

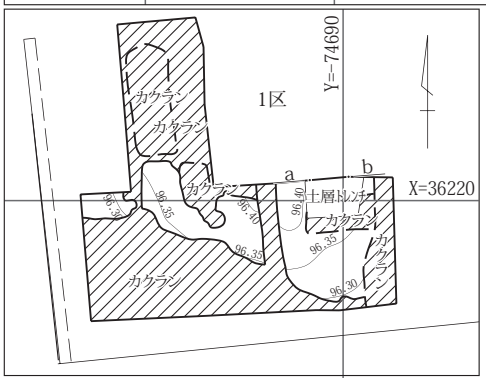
３　梅ノ木郭南堀の埋門

２区-①東側区域の南寄りで、梅ノ木郭南側の堀の南壁(南側張出部)とみられる斜面を検出した(第６図k-l)。頂部は撹乱によって破壊されていたが、北西方向も削られて狭くなっていた。直上の埋没土から陶磁器が出土した。斜面の長さは3.5mで、頂部からの深さは約３ｍである。斜面裾に幅70cm前後の平坦面が作られ、杭が裾に沿って３本並んで打ち込まれていた(第７図)。この平坦面から北側にかけて、10～50cm大の石が不規則に出土しており、石組み遺構が崩落した可能性がある。平坦面から北側の石の下位はさらに低くなっており、掘り下げることができたが、上位に存在する埋設管を保護するため、下部への掘り下げを断念した。

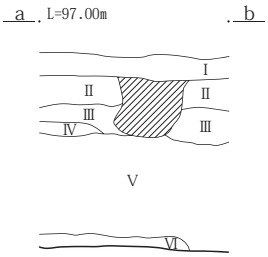




0　1：400　20m



0　1：200　10m



基本土層　a-b

Ⅰ　砕石

Ⅱ　黒褐色土　ロームとの互層。版築土。
　　非常に硬く締まる。
　　以下、高崎泥流

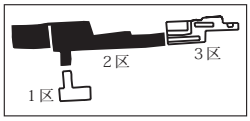
Ⅲ　明黄橙色土　シルト質土。

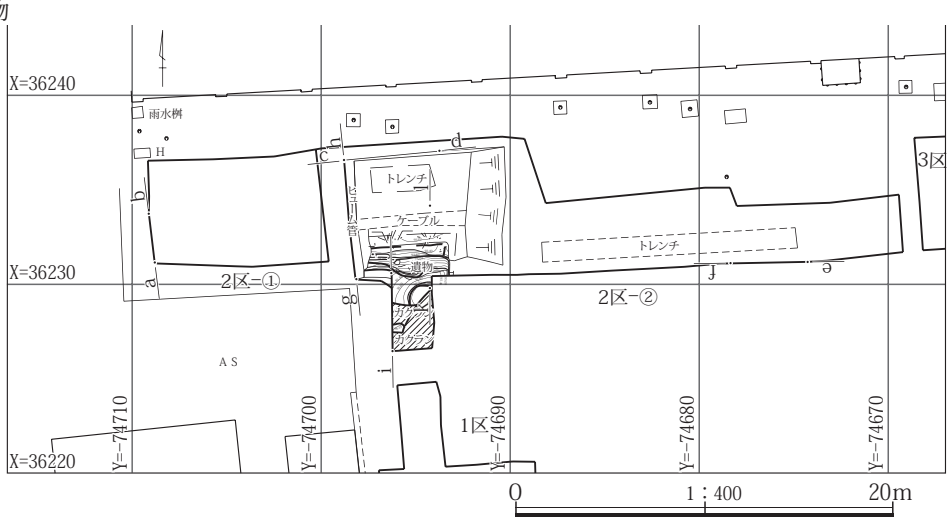
Ⅳ　明黄灰色土　シルト質土。火山灰か。

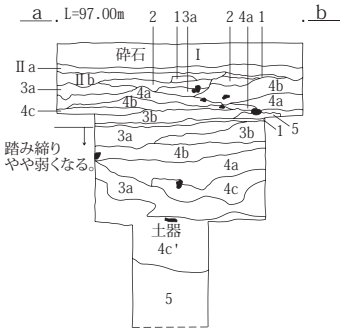
Ⅴ　シルトと小礫の混土。径２～10㎜の軽
　　石が混じる。締まり弱い。

Ⅵ　明黄橙色土　シルト質土。

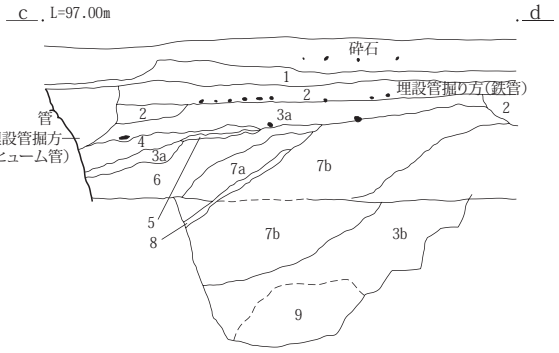
第５図　１面全体図・２面全体図及び１区２面



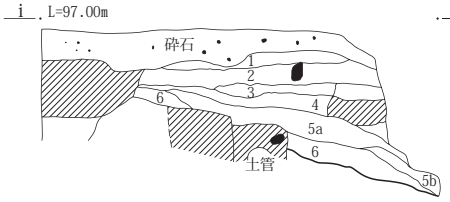




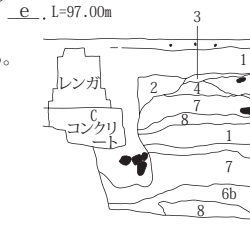
２区-①　西壁
基本土層　a-b
Ⅰ　碎石
Ⅱa　黒色版築土　礫・瓦片を多量に含む。非常に硬く締まる。
Ⅱb　Ⅱaより瓦片を多く含む。
1　暗黄橙色土　高崎泥流と灰褐色土を突き固めた層。
2　暗灰褐色土　くすんだ高崎泥流を突き固めた層。
3a　くすんだ黄褐色土　高崎泥流のシルトに軽石を多く含む。締まり強い。
3b　明黄橙色土　高崎泥流上層土主体。
4a　くすんだ灰褐色土　軽石・礫混じり。締まり非常に強い。
4b　くすんだ灰褐色土　4aより混入物少ない。締まり非常に強い。
4c　くすんだ灰褐色土　4bよりさらに混入物少ない。締まり非常に強い。
4c'　くすんだ灰褐色土　瓦片を多く含む。締まり弱い。
5　黒色炭化物層　瓦片を多く含む。締まり弱い。

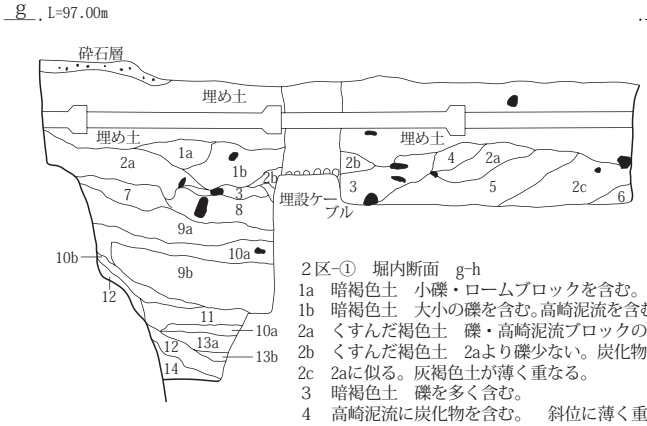


２区-①　北壁　基本土層
c-d
1　暗褐色土　礫を含む。締まり強い。
2　暗褐色土　砂混じり。
3a　黄褐色土　高崎泥流に褐色土ブロックを含む。小礫混じり。
3b　黄褐色土　高崎泥流主体。褐色土が混じる。左下がりラミナ堆積。
4　灰褐色土　小礫混じり。わずかに炭化物を含む。
5　黄灰褐色土　灰層に炭化物混じり。
6　暗褐色土　大小の礫が多く混じる。
7a　暗灰褐色土　高崎泥流・小礫・砂が混じる。左下がりラミナ堆積。
7b　暗灰褐色土　7aより礫・高崎泥流を多く含む。
8　灰白色土　シルト質。小礫混じり。
9　暗褐色土　礫混じり。



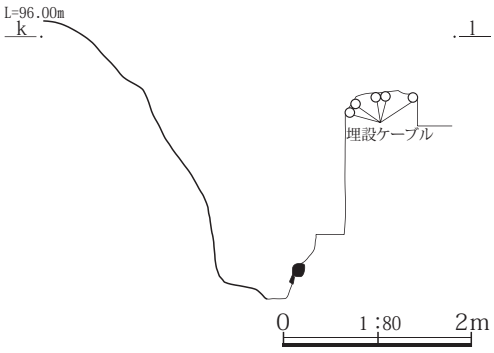
２区-①　堀断面　i-j
1　褐色土　小礫を含む。非常に硬く締まる。
2　褐色土　小礫を含む。高崎泥流ブロック・礫を含む。
3　くすんだ褐色土　小礫を含む。高崎泥流ブロック・礫を含む。
4　明黄橙色土　高崎泥流主体。小礫を含む。
5a　くすんだ高崎泥流と炭化物が薄く重なる。締まり弱い。
5b　黒色炭化物層。
6　褐色土　小礫を含む。締まり弱い。



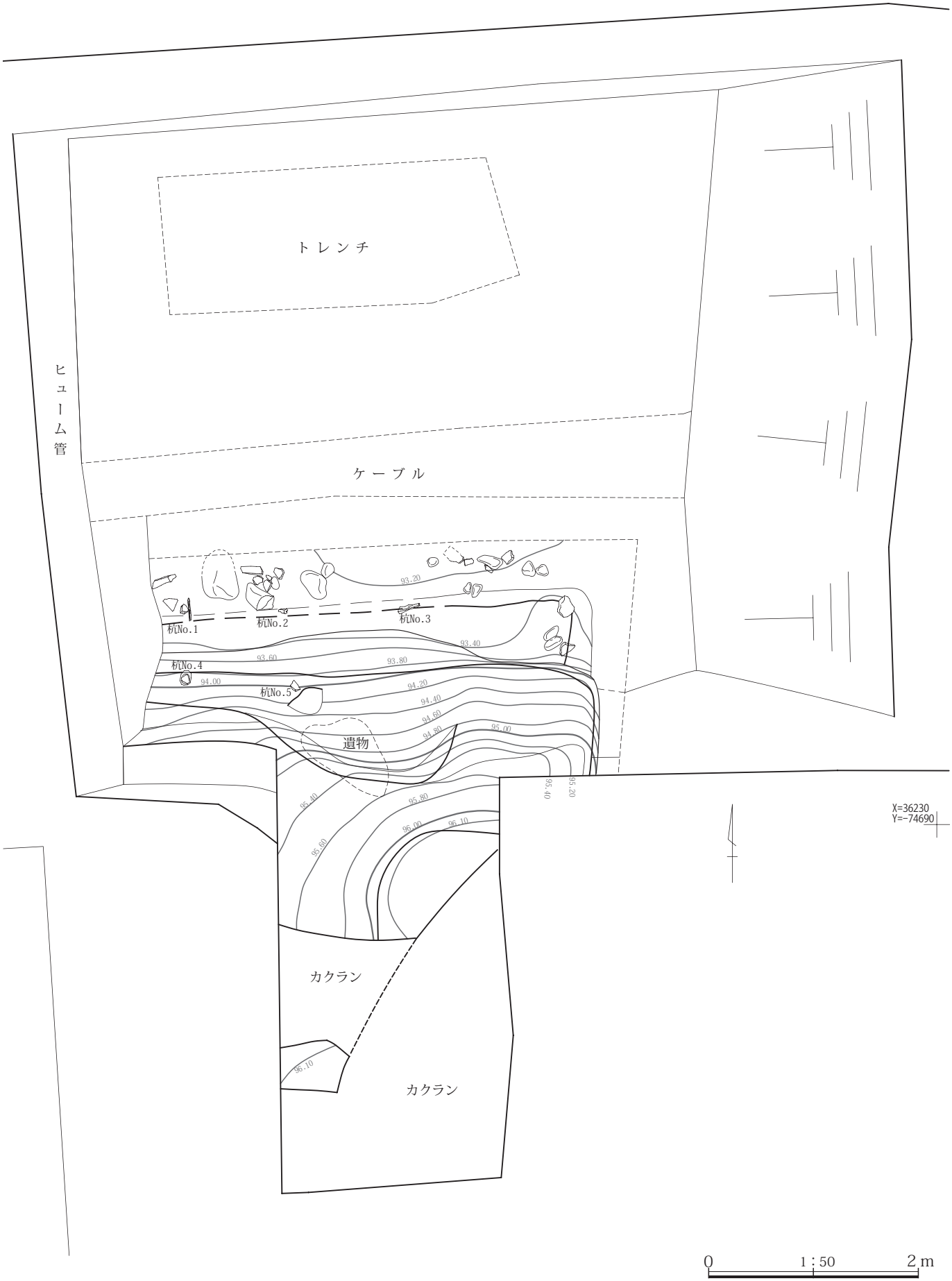


２区-②　南壁　基本土層　e-f
1～5　版築層
1　くすんだ黒褐色土　小礫混じり。硬く締まっている。
2　高崎泥流ブロックと黒褐色土の混土。硬く締まっている。
3　灰褐色砂礫
4　暗褐色土　高崎泥流が薄く重なる。小礫を含む。
5　くすんだ黄褐色土　高崎泥流と褐色土の混土。小礫多く混じる。
6a　暗褐色土　小礫を含む。わずかに高崎泥流含む。
6b　暗褐色土　6aより高崎泥流を多く含む。
7　黄褐色土　高崎泥流主体。小礫混じる。
8　くすんだ黄褐色土　高崎泥流と暗褐色土の混土。小礫混じり。

２区-①　堀内断面　g-h
1a　暗褐色土　小礫・ロームブロックを含む。
1b　暗褐色土　大小の礫を含む。高崎泥流を含む。くすんだ地山。
2a　くすんだ褐色土　礫・高崎泥流ブロックの混土。
2b　くすんだ褐色土　2aより礫少ない。炭化物を多く含む。
2c　2aに似る。灰褐色土が薄く重なる。
3　暗褐色土　礫を多く含む。
4　高崎泥流に炭化物を含む。　斜位に薄く重なって堆積。
5　くすんだ褐色土
6　暗褐色土
7　暗褐色土と高崎泥流土が薄く重なって堆積する。締まり強い。
8　暗褐色土　礫を含む。
9a　暗褐色土　灰褐色土ブロック・高崎泥流小ブロック・炭化物を含む。小礫を多く含む。
9b　暗褐色土　9a層より礫が少ない。
10a　灰褐色土　灰褐色粘土・高崎泥流土・炭化物の混土。
10b　黒色炭化物層　小礫・高崎泥流土を含む。
11　くすんだ褐色土　小礫を含む。砂質。締まり弱い。
12　褐色土　高崎泥流のくすんだ層。小礫混じり。
13a　暗褐色土　小礫・炭化物を含む。
13b　暗褐色土　高崎泥流小ブロックを含む。粘質。
14　明黄褐色土　高崎泥流崩落土。



第６図　２区土層断面



第７図　２区-①２面東側(埋門付近)平面図

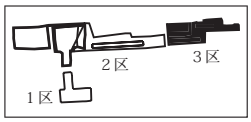
４　２区-②

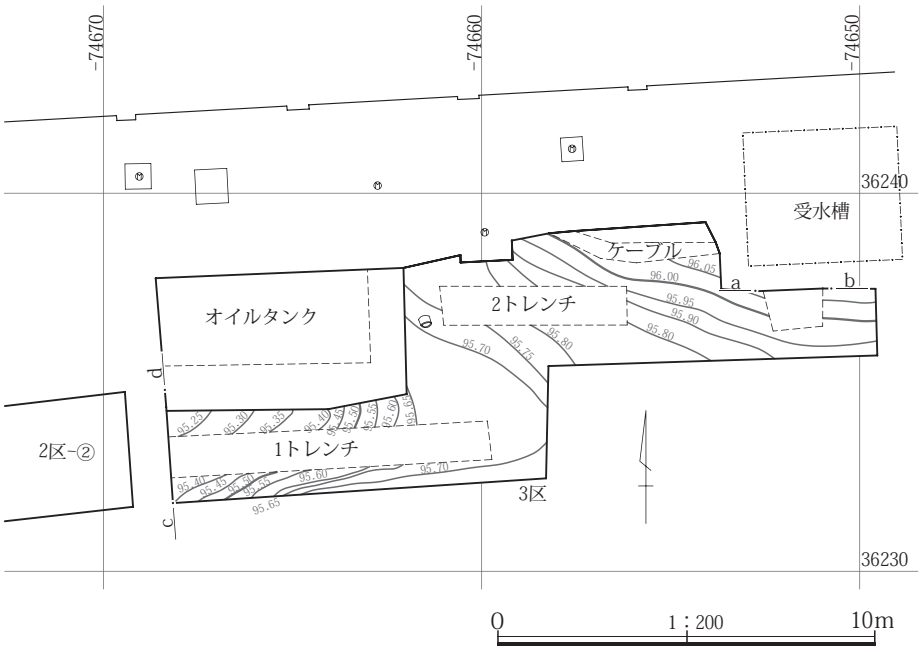
陸軍第十五連隊時代の建物の一部とみられる、コンクリート基礎に煉瓦積みの構築物を検出した。この構築物を撤去したのち、下位に掘り下げて、梅ノ木郭南側の堀埋没土の堆積状態を確認した(第６図e-f)。

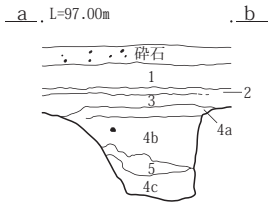
第４節　３区の調査(第５・８図、PL．７)

３区は東寄りの区域である。調査区域のなかにオイルタンクや受水槽があるほか、本館側(北側)に埋設管等があるなど、調査可能な範囲が狭小である。安全上の都合により、調査範囲はクランク状となり、堀底面の検出まで至らなかった。

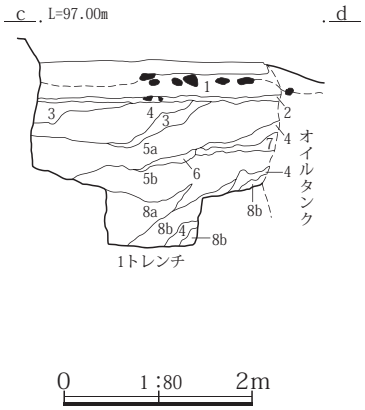
３区１トレンチは、部分的に深さ約２ｍまで掘削し、堆積状態を確認した。土層断面の最低部は、堀底面ではない。埋没土は南下がりに深くなる状態であった。







基本土層　a-b
1　暗褐色土　高崎泥流。小礫をわずかに含む。
2　灰黄褐色土　高崎泥流と灰褐色土が薄く重なる。
3　くすんだ褐色土　高崎泥流に暗褐色土が混じる。
4a　明黄褐色土　高崎泥流主体。非常に硬く締まる。
4b　明黄褐色土　小礫を含む。4a層より締まり強い。
4c　明黄褐色土　4a層よりシルト質。
5　明黄褐色土　暗褐色土をわずかに含む。



堀　c-d
1　くすんだ褐色土　高崎泥流小ブロック・暗褐色土を含む。小礫を含む。硬く締まる。
2　明黄褐色土　高崎泥流と灰褐色土が薄く重なる。小礫・砂を含む。
3　暗黄褐色土　高崎泥流と褐灰色土ブロックの混土。締まっている。
4　灰褐色土　高崎泥流ブロックを少量含む。小礫を含む。
5a　明黄褐色土　高崎泥流主体。礫を含む。
5b　明黄褐色土　5aより礫少ない。褐色土ブロックを少量含む。
6　黄褐色土　高崎泥流。砂を含む。
7　明黄白色土　高崎泥流ブロック主体。
8a　くすんだ黄褐色土　砂質。細砂を含む。左下がりに薄く重なって堆積。
8b　くすんだ黄褐色土　砂質。細砂を含む。

第８図　３区２面

第５節　出土遺物(第９～19図、PL．８～16)

ここでは１～３区出土遺物の概要を記す。

主な出土遺物は２区-①東側の埋門出土の陶磁器である。１は製作地不詳の湯飲み、２～５は丸碗である。７～35は32を除き瀬戸・美濃の磁器で、端反碗である。37は丼、38～82は瀬戸・美濃系の磁器で、文様・モチーフの良く似た皿である。83・84は陶器皿である。86は白磁皿製作地不詳である。87は洋皿である。88は製作地不詳の行平か鍋の陶器蓋である。外面中央の摘み内に「第一中隊曹長室用」と墨で書かれている。89も製作地不詳で、陶器土瓶である。

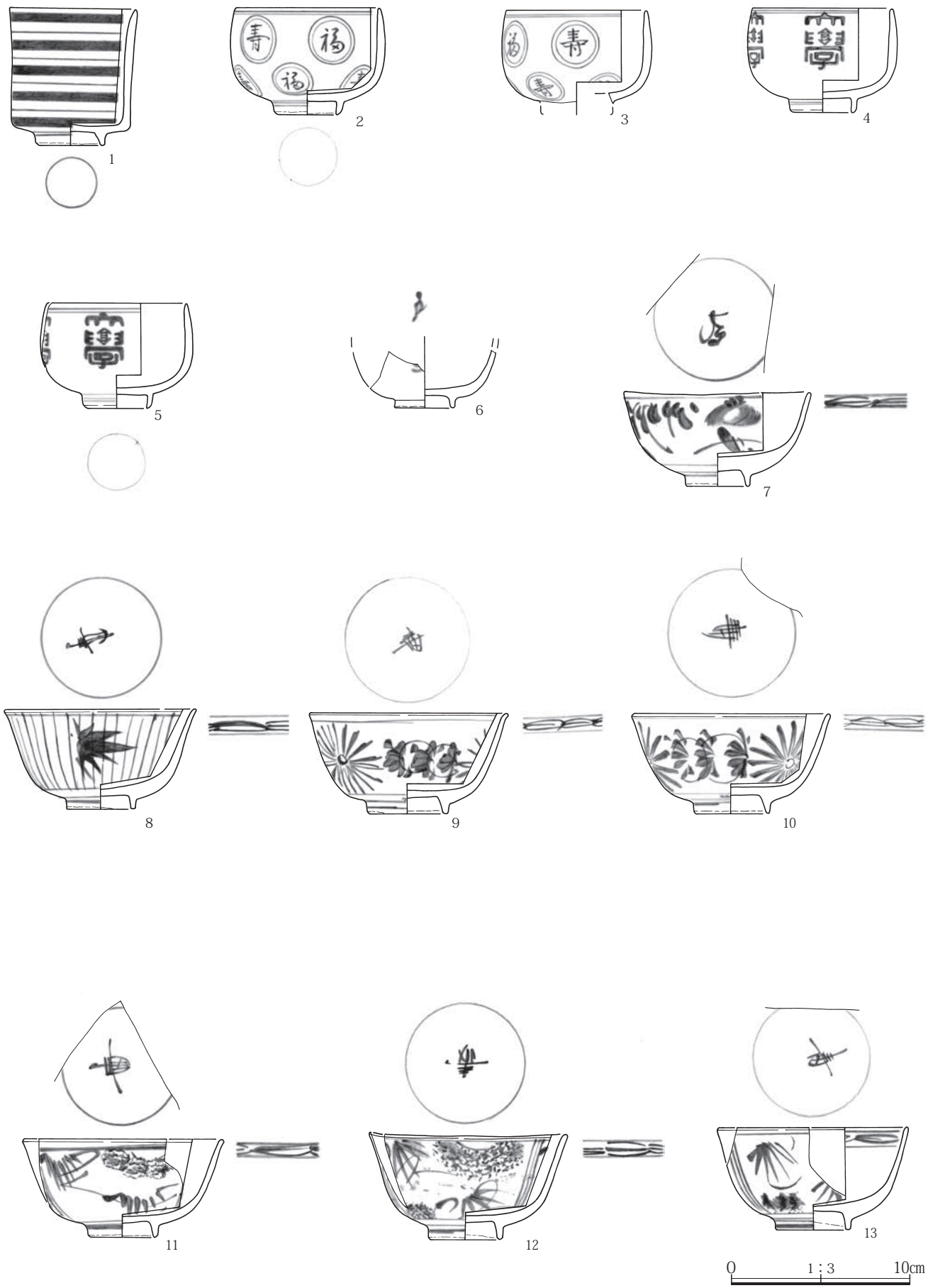
90から93は瓦で、92は瓦頭面の文様がほぼ判明する。

94は１区出土の丸碗で、掲載可能なものはこの１点である。製作地不詳の磁器である。95は３区出土の白磁皿で、やはり掲載可能な遺物はこの１点である。

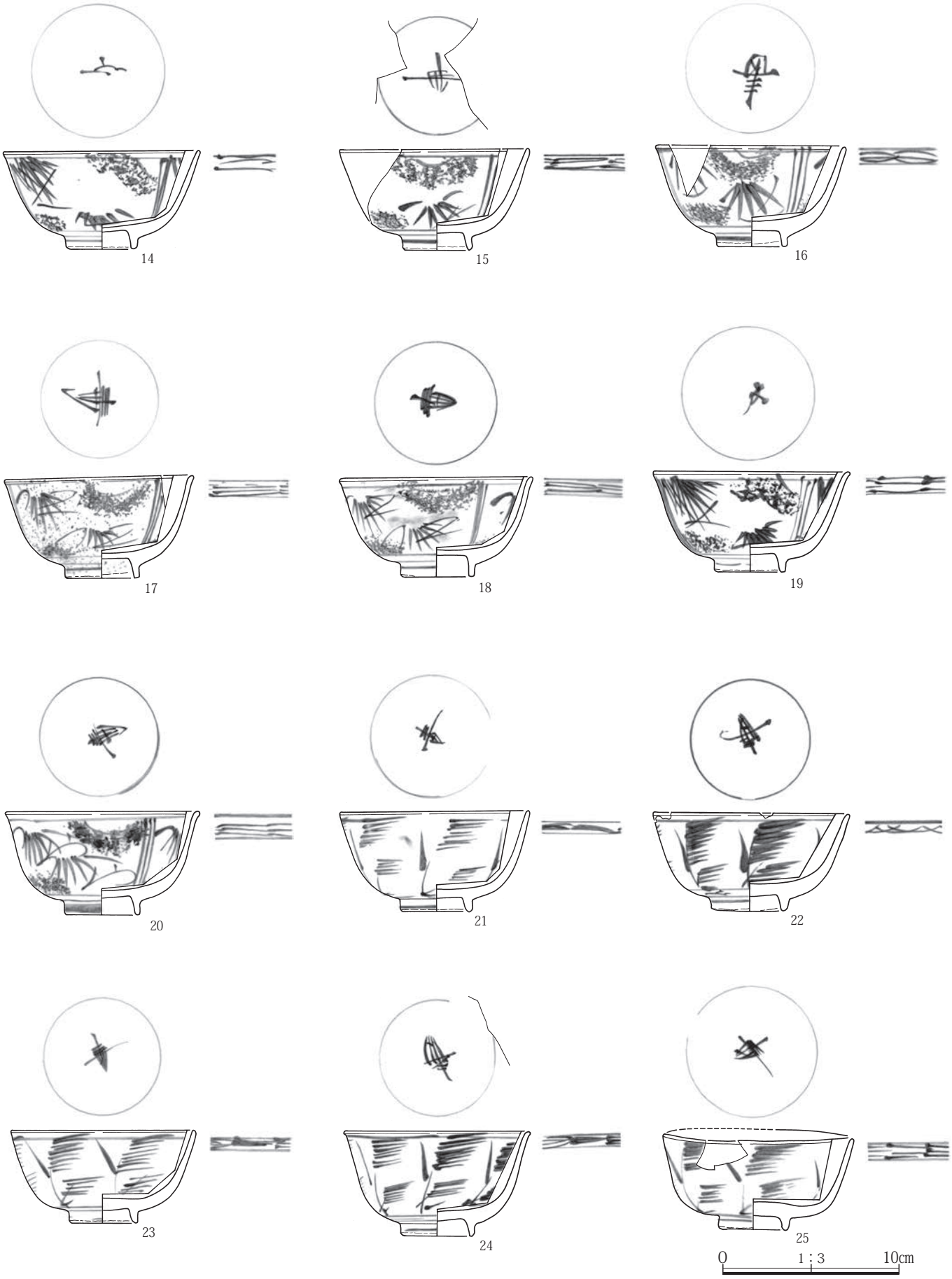
96から101はすべて２区出土の金属製品である。96は雁首を欠くキセルで、中央のラウ部は全体に鉄銹色を呈する。97と98は鉄釘とみられ、２区-①東側の埋門中段から出土した。98は木質が付着している。99は断面円形の針金状の銅製品で、一部を欠く。100は円盤状の縁が直立する金具で、襖の引手のような形状である。101は釘か。

102は２区-①東側底面出土の木杭である(PL.16)。長さ112㎝、中央部付近の径６㎝ほどで、先端部を鋭利な刃物で尖らせている。先端部は焼いているようである。樹種はクリである。

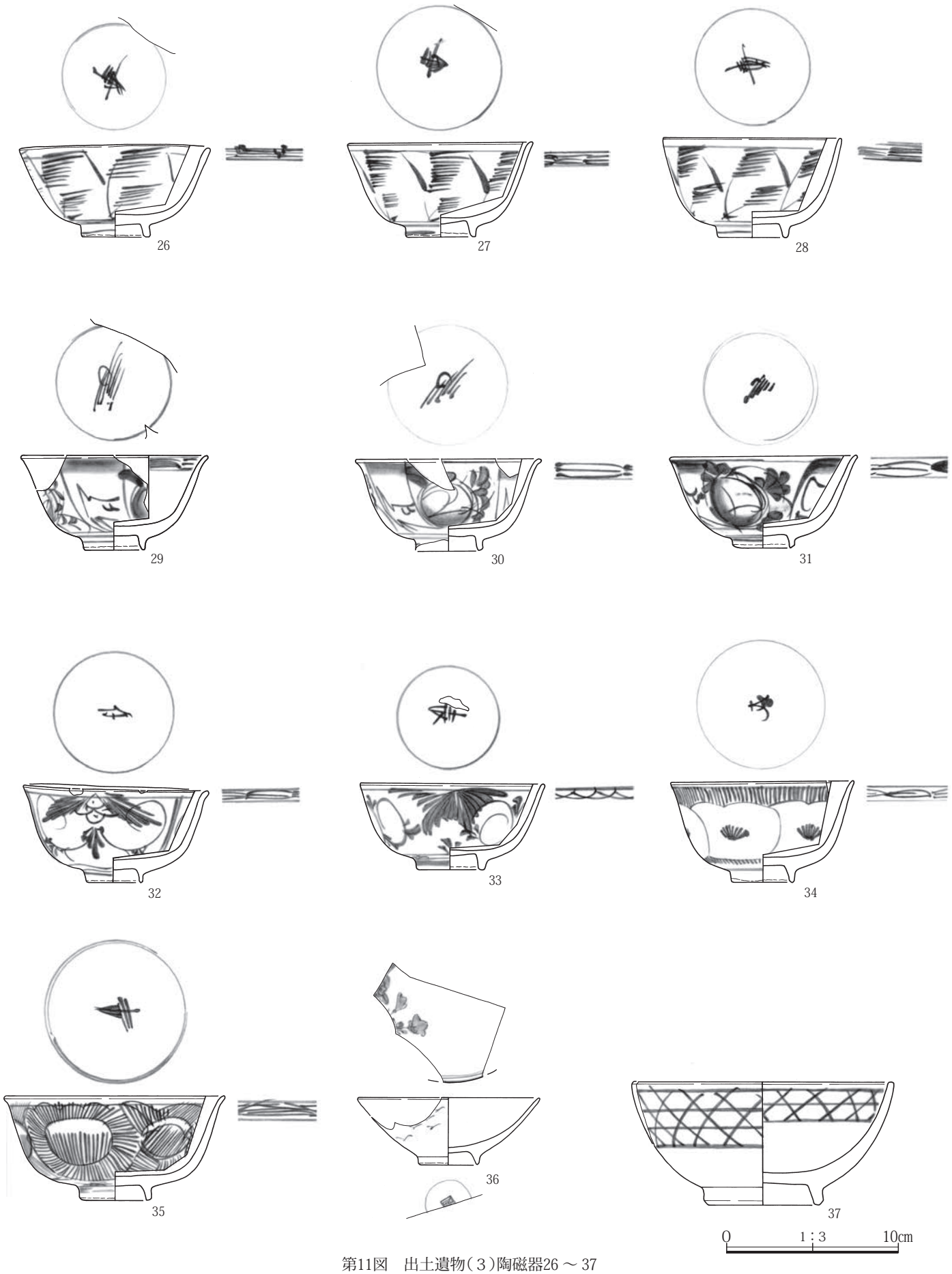
個別の遺物の詳細は、観察表に記した。



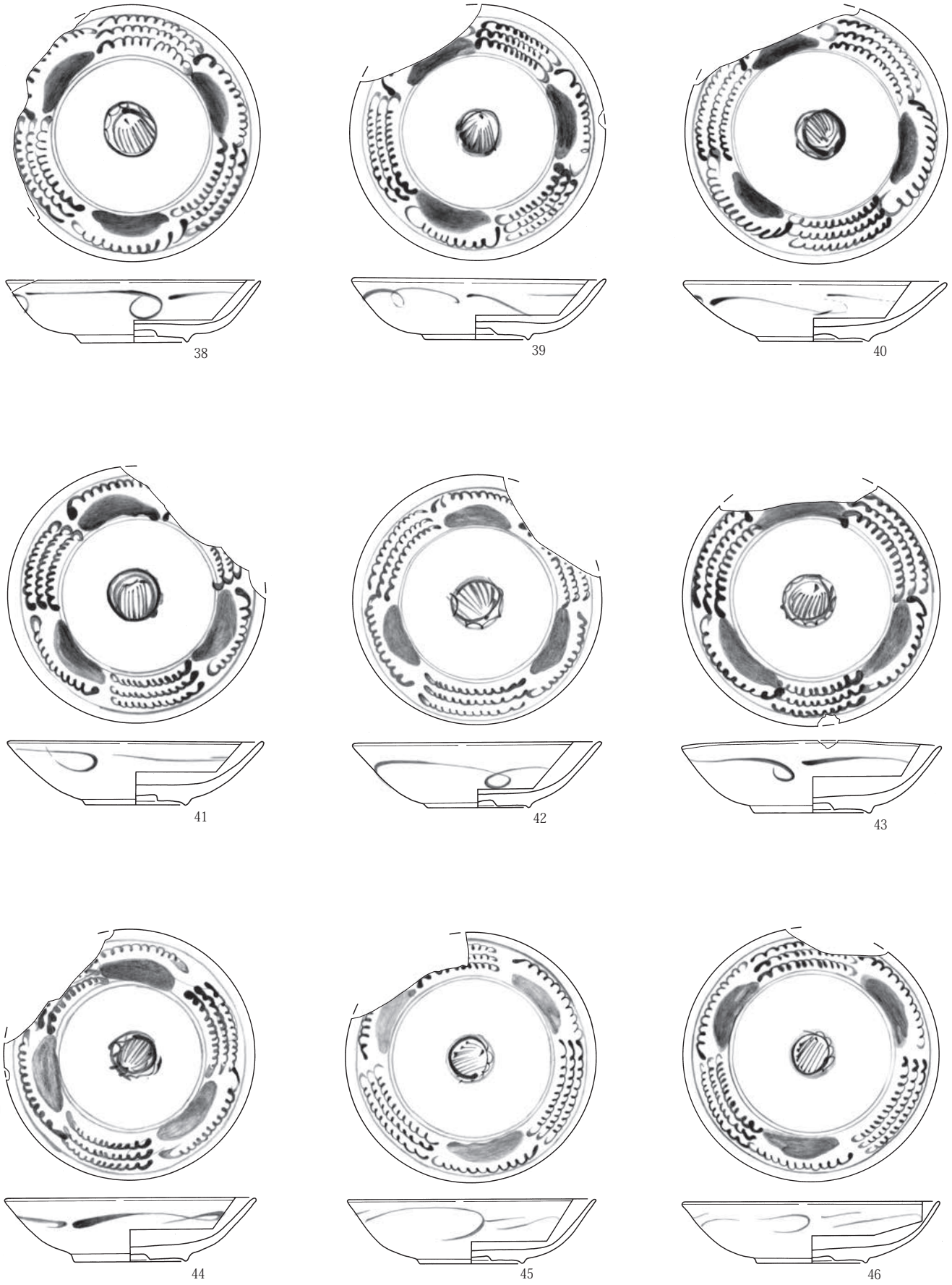
第９図　出土遺物（１）陶磁器１～13



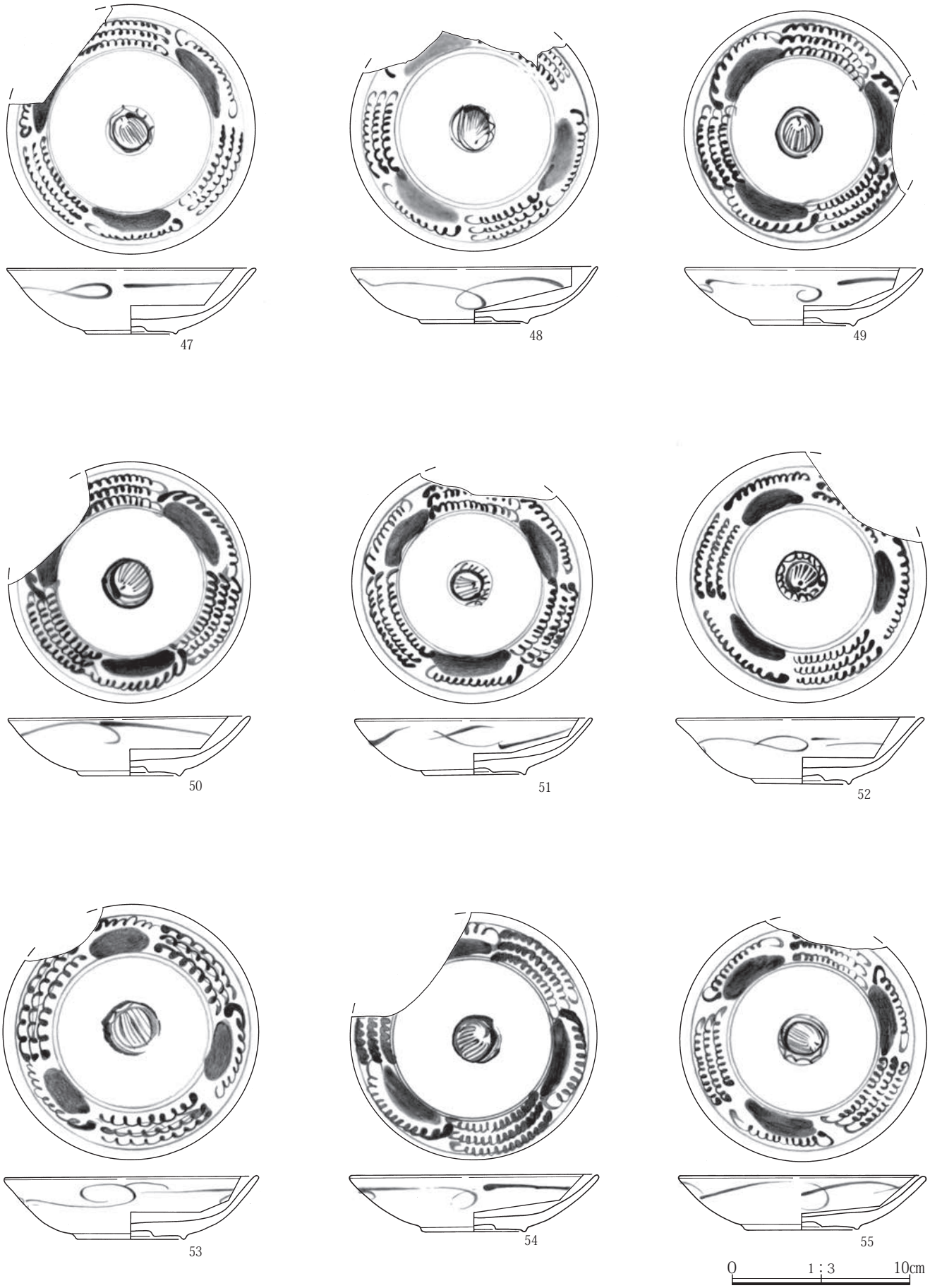
第10図　出土遺物（２）陶磁器14 ～ 25



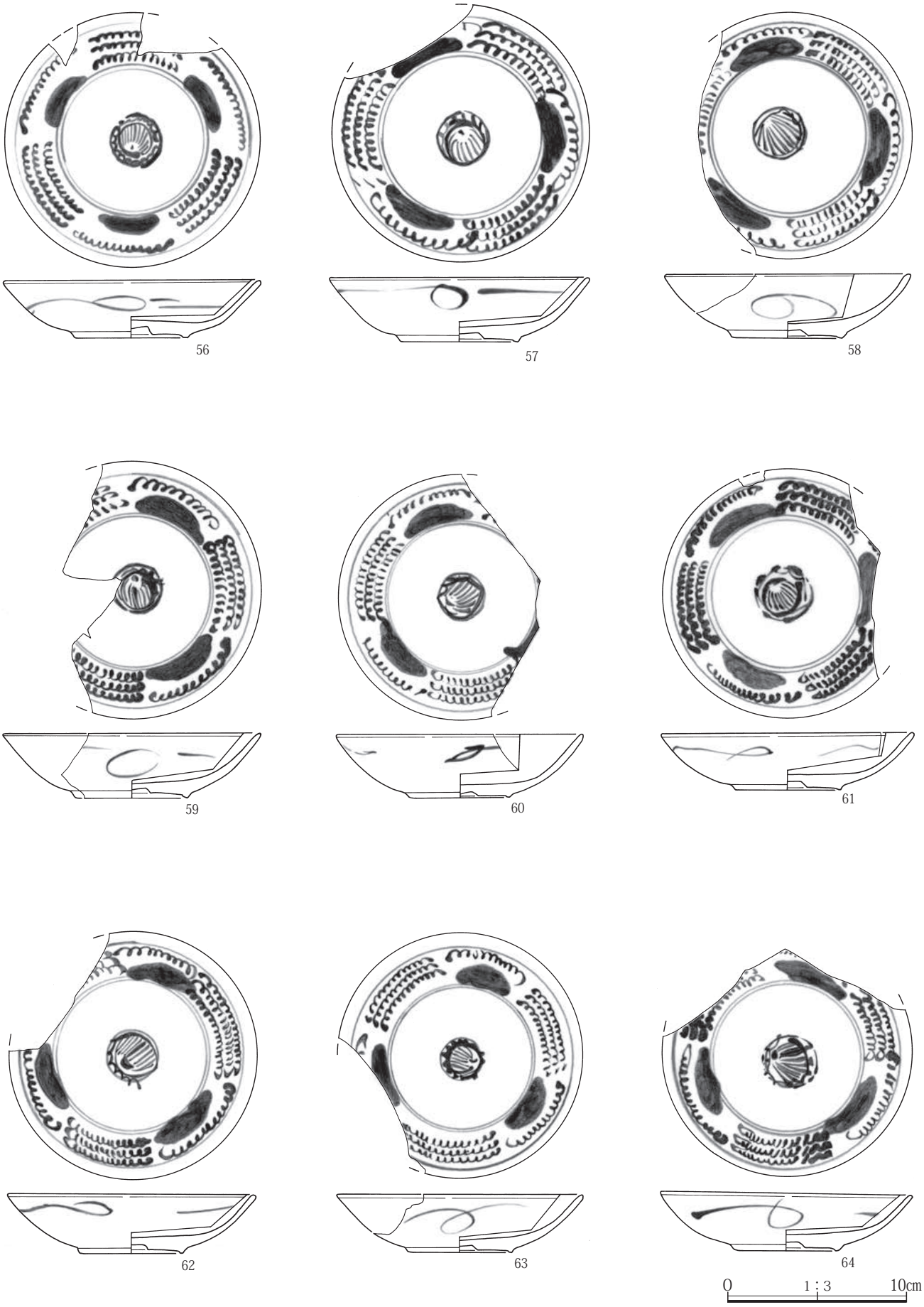
第11図　出土遺物（３）陶磁器26 ～ 37



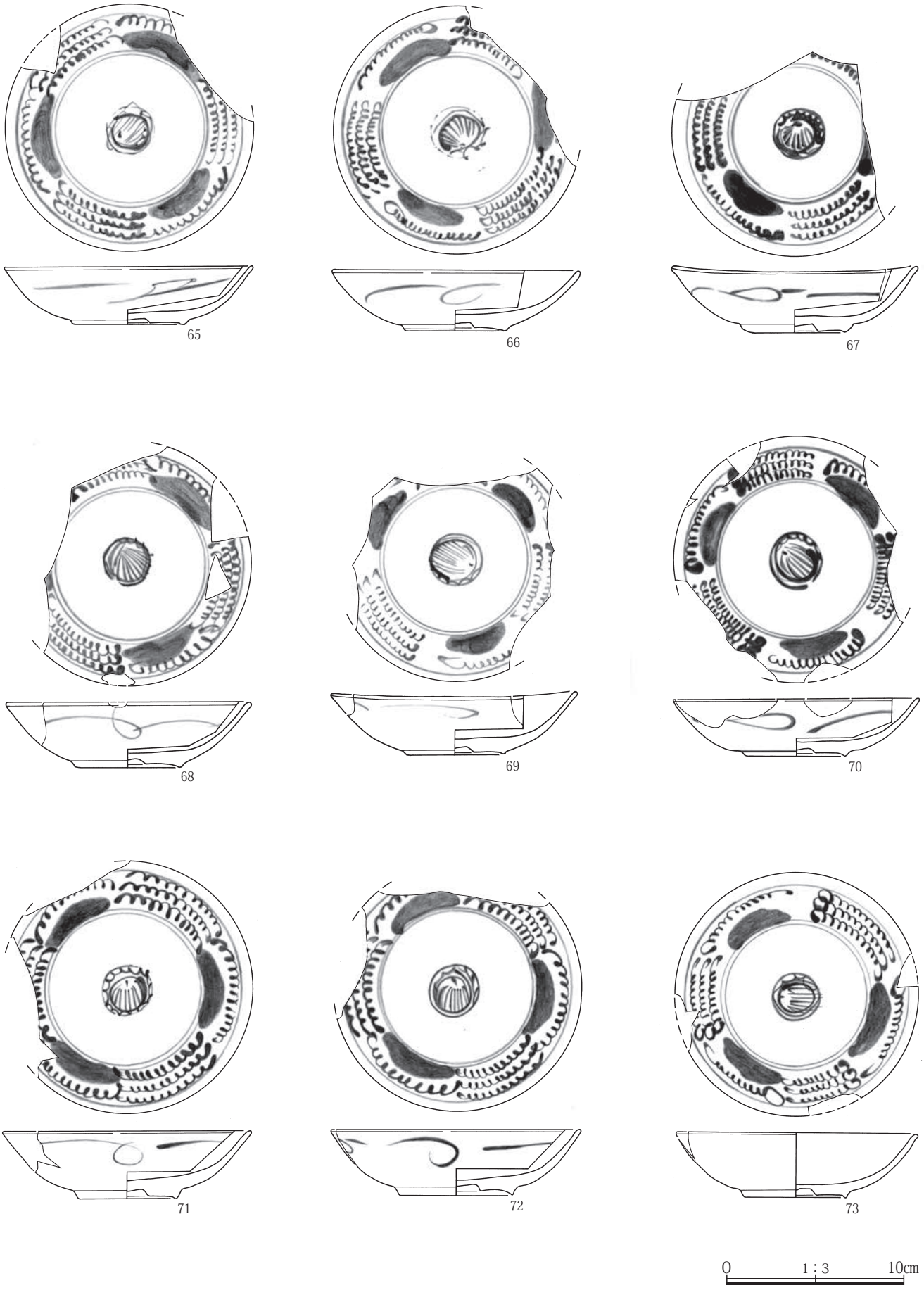
第12図　出土遺物（４）陶磁器38 ～ 46



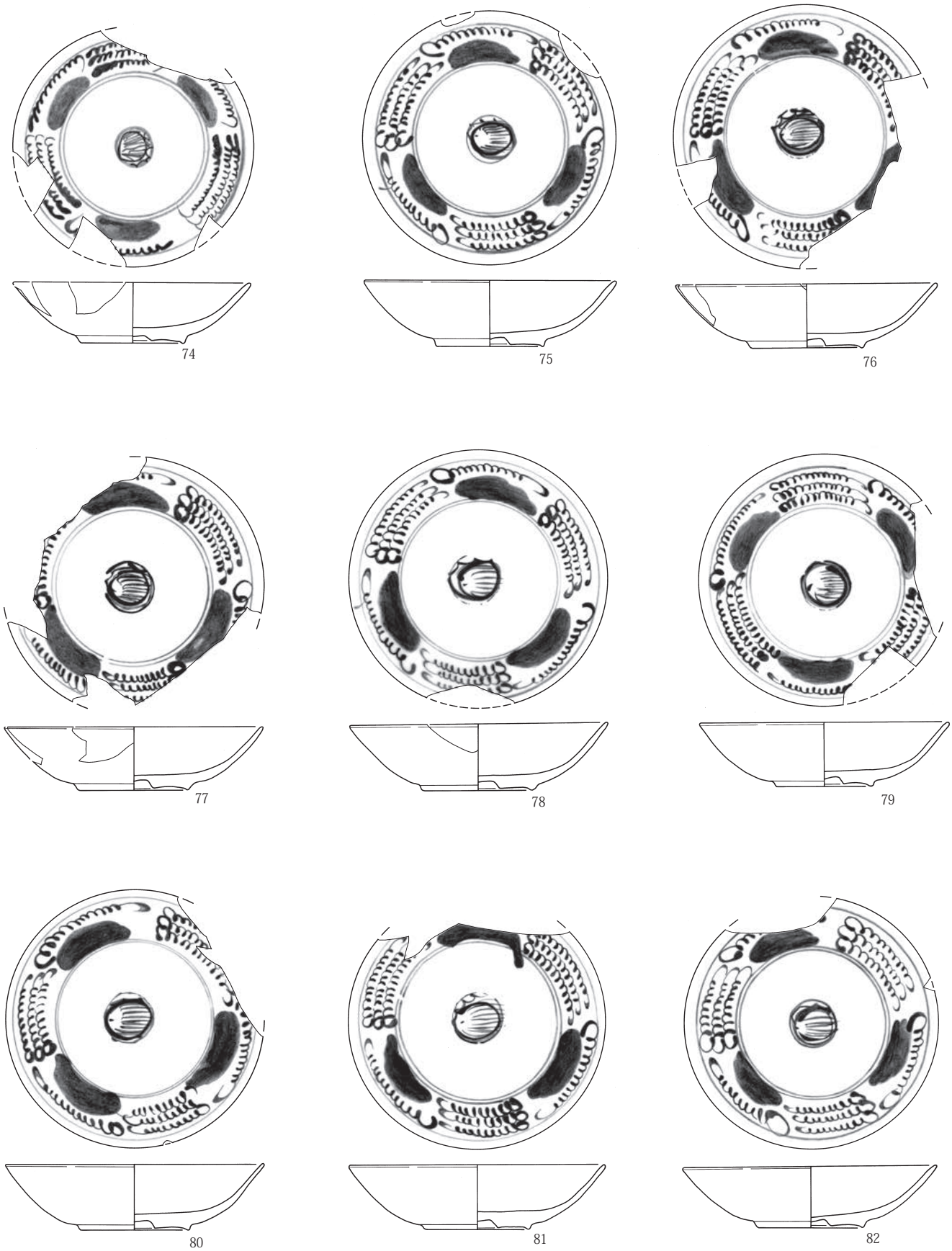
第13図　出土遺物（５）陶磁器47 ～ 55



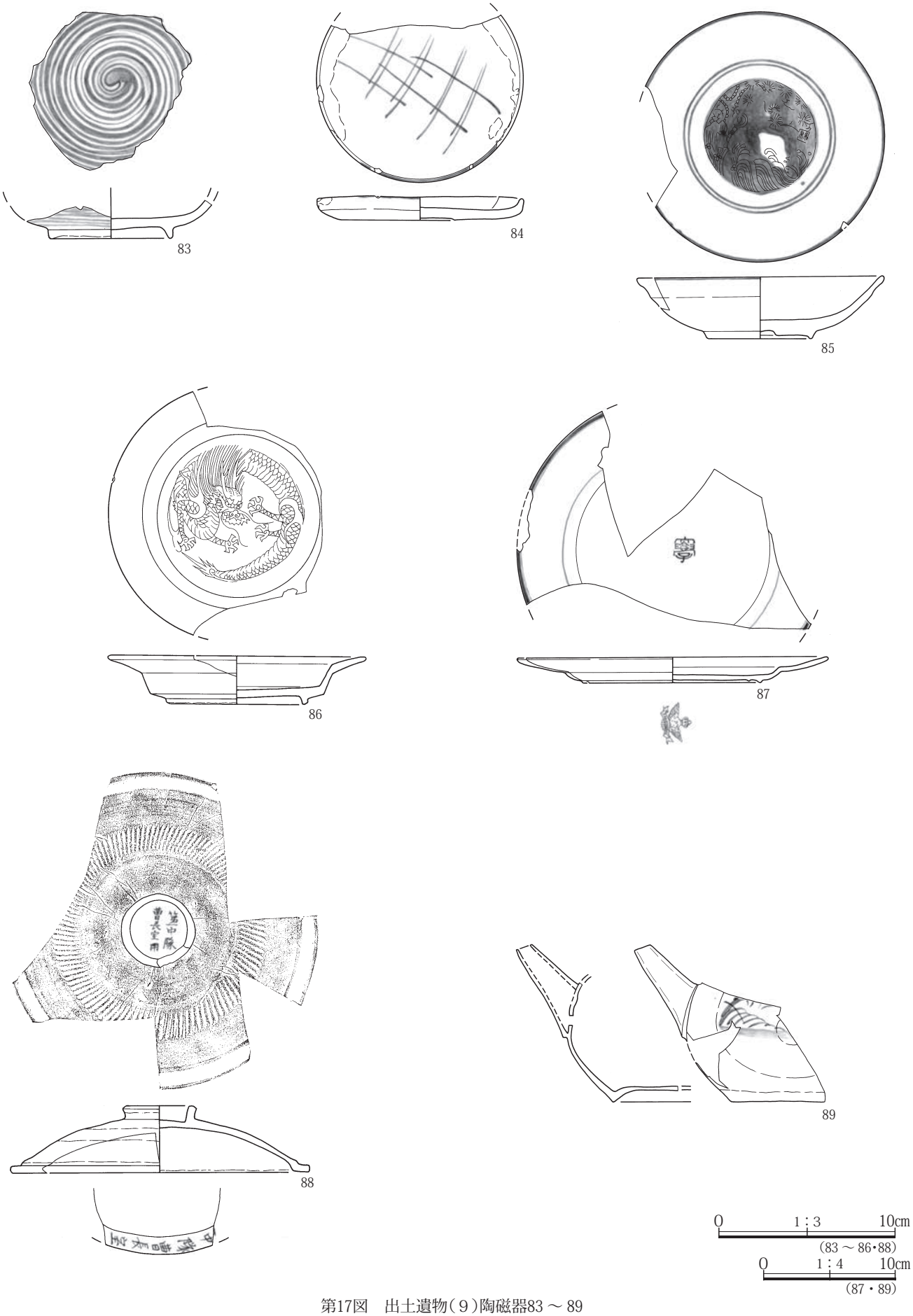
第14図　出土遺物（６）陶磁器56 ～ 64



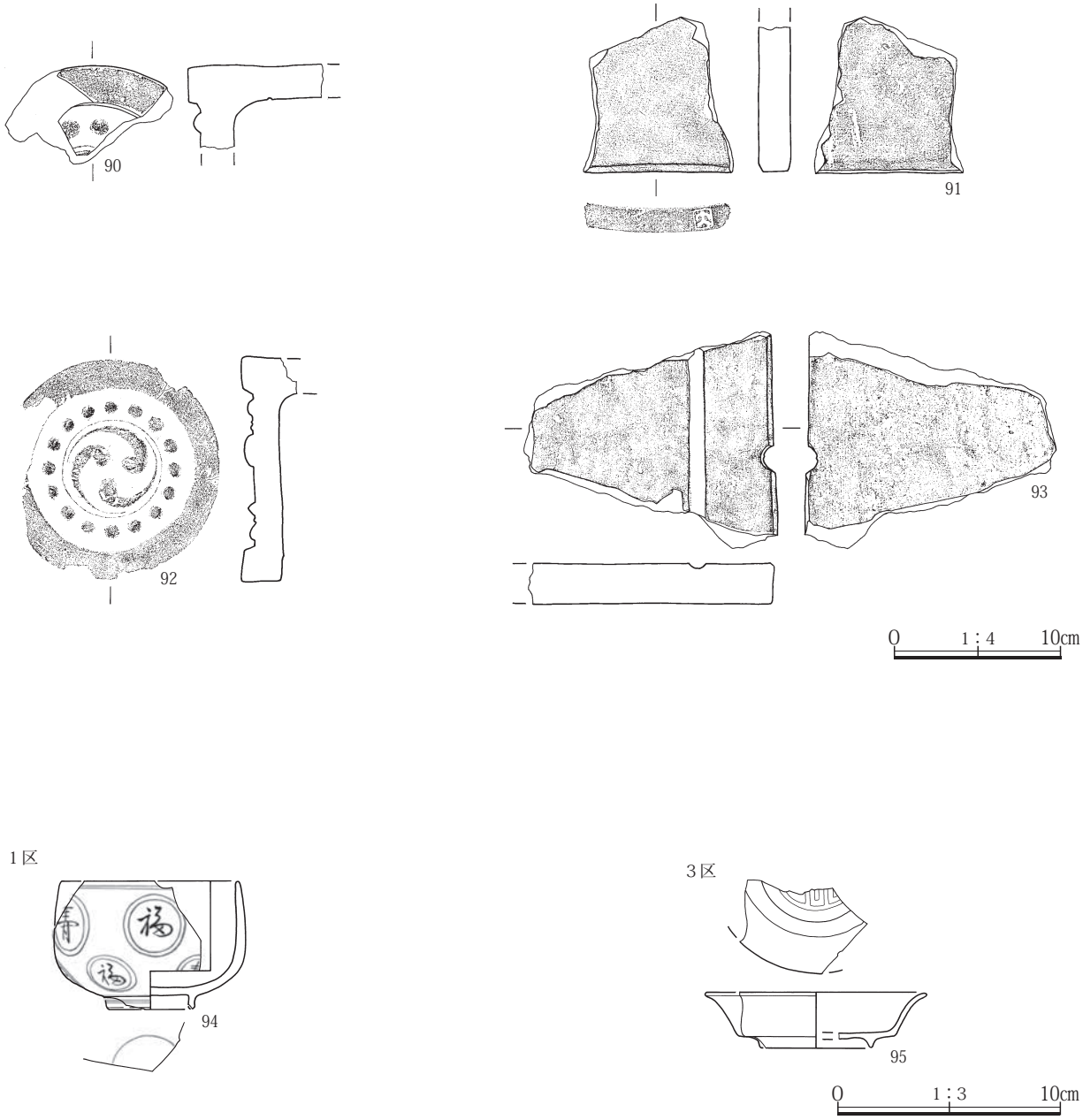
第15図　出土遺物（７）陶磁器65 ～ 73



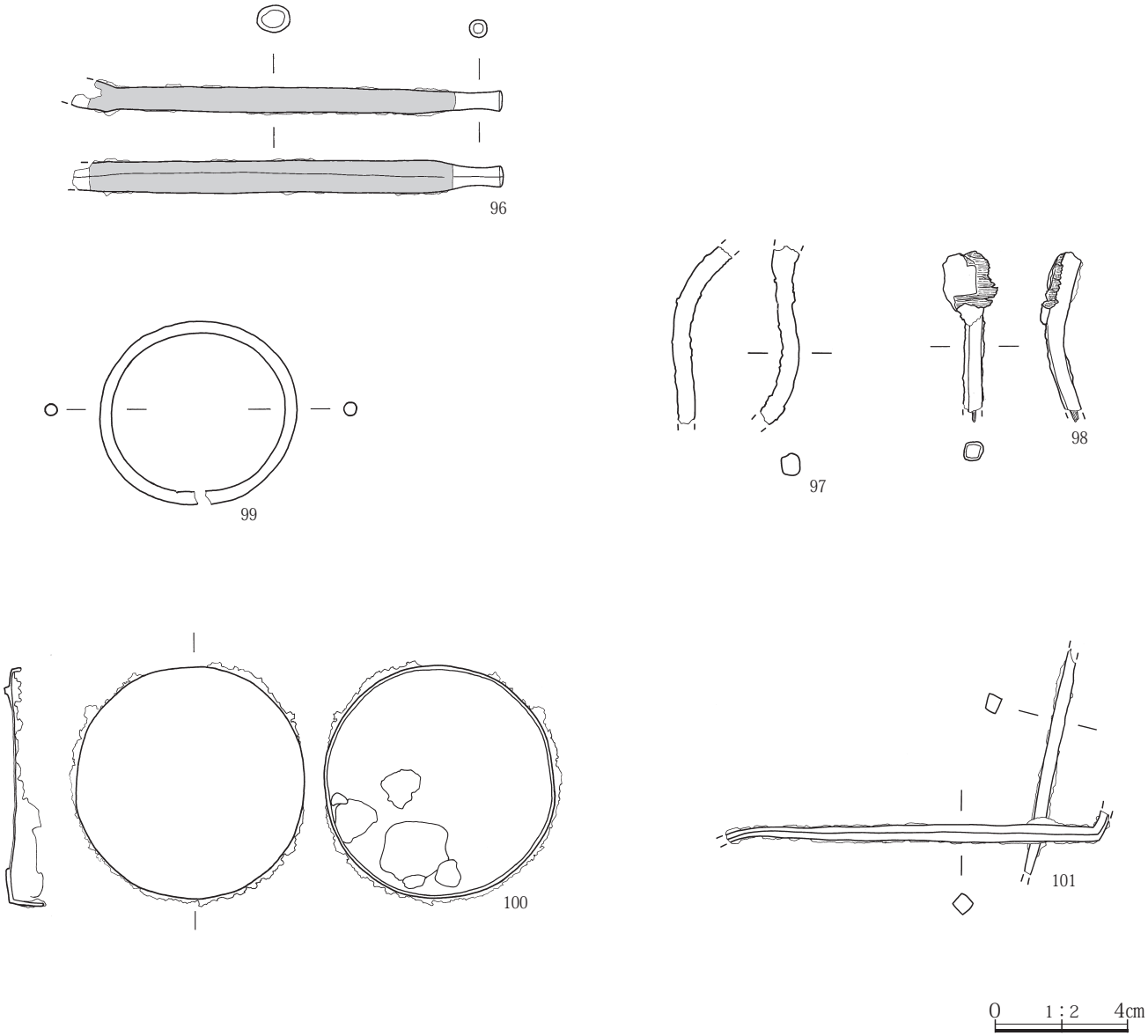
第16図　出土遺物（８）陶磁器74 ～ 82



第17図　出土遺物（９）陶磁器83 ～ 89



第18図　出土遺物(10)瓦・陶磁器90 ～ 95



第19図　出土遺物(11)金属製品96 ～ 101

第２表　遺物観察表

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
1	第9図 PL.8	製作地不詳 磁器 湯飲み	2区埋門中段 口縁部から体部一部欠	口	7.0	高	7.6	白//	体部はゆるく外反。外面は幅広と細線を交互に描く。高台内周縁は１重圏線。	近現代。
				底	3.6					
2	第9図 PL.8	製作地不詳 磁器 丸碗	2区埋門中段 口縁部から体部一部欠	口	7.9	高	5.9	白//	口縁部外面と高台外面、高台内周縁は染付による細い圏線。外面圏線間、２重丸内「福」、「寿」字文を散らす。高台端部外面は斜めに削る。高台内周縁は１重圏線。呉須はやや黒味を帯びる。	近現代。
				底	3.4					
3	第9図 PL.8	製作地不詳 磁器 丸碗	2区埋門中段 2/1	口	(7.8)	高	—	白//	口縁部外面と高台外面、高台内周縁は染付による細い圏線。外面圏線間、２重丸内「福」、「寿」字文を散らす。高台端部外面は斜めに削る。高台内周縁は１重圏線。呉須はやや黒味を帯びる。	近現代。
				底	—					
4	第9図 PL.8	製作地不詳 磁器 丸碗	2区埋門中段 口縁部から体部 1/2欠	口	(3.5)	高	5.8	白//	口縁部外面と高台外面、高台内周縁は染付による細い圏線。口縁部から体部外面の４方に青色上絵具による「大学」字。文字は濃い縁取り内の色が薄く、ゴム印版であろう。高台端部外面は斜めに削る。	近現代。
				底	3.5					
5	第9図 PL.8	製作地不詳 磁器 丸碗	2区埋門中段 口縁部3/4欠	口	(7.8)	高	5.8	白//	口縁部外面と高台外面、高台内周縁は染付による細い圏線。口縁部から体部外面の４方にコバルトブルーの上絵具による「大学」字。高台端部外面は斜めに削る。	近現代。
				底	3.4					
6	第9図 PL.—	瀬戸・美濃 磁器か 碗	2区埋門中段 底部	口	—	高	—	白//	底部内面に不明文様。体部外面に染付一部残る。呉須は酸化コバルトか。	19世紀中頃か。
				底	3.3					
7	第9図 PL.8	瀬戸・美濃 磁器か 端反碗	2区埋門中段 口縁部から体部 3/4欠	口	(10.3)	高	5.2	白//	口縁部歪む。外面は簡略化した植物文。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に不明文様。呉須は酸化コバルト。	近代。
				底	3.6					
8	第9図 PL.8	瀬戸・美濃 磁器か 端反碗	2区埋門中段 口縁部一部欠	口	10.6	高	5.5	白//	外面は縦格子地文にカエデ状文を３方に配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に崩れた「寿」字文。呉須は酸化コバルトか。	近代。
				底	3.8					
9	第9図 PL.8	瀬戸・美濃 磁器 端反碗	2区埋門中段 口縁部1/3欠	口	10.1～11.0	高	5.5	白//	口縁部歪む。外面に唐草文。唐草文は蔓部分と花部分をセットで３方に配す。蔓部分の下部に格子状文。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に崩れた「寿」字文。呉須は酸化コバルト。	近代。
				底	4.4					
10	第9図 PL.8	瀬戸・美濃 磁器 端反碗	2区埋門中段 口縁部から体部 1/2欠	口		高		白//	口縁部歪む。外面に唐草文。唐草文は蔓部分と花部分をセットで３方に配す。蔓部分の下部に格子状文。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に崩れた「寿」字文。呉須は酸化コバルト。	近代。
				底						
11	第9図 PL.8	瀬戸・美濃 磁器か 端反碗	2区埋門中段 口縁部から体部 一部欠	口	(11.0)	高	5.4	白//	外面は３条の縦線３組で区切った中に笹状文を３方に配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に崩れた「寿」字文。呉須は酸化コバルト。	近代。
				底	3.6					
12	第9図 PL.8	瀬戸・美濃 磁器か 端反碗	2区埋門中段 口縁部1/4欠	口	11.0	高	5.7～5.9	白//	外面は３条の縦線３組で区切った中に笹状文を３方に配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に崩れた「寿」字文。呉須は酸化コバルト。	近代。
				底	4.0					
13	第9図 PL.8	瀬戸・美濃 磁器か 端反碗	2区埋門中段 口縁部一部、底部完	口	(10.5)	高	5.7	白//	外面は３条の縦線３組で区切った中に笹状文を３方に配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に崩れた「寿」字文。呉須は酸化コバルト。	近代。
				底	4.1					
14	第10図 PL.8	瀬戸・美濃 磁器か 端反碗	2区埋門中段 口縁部1/5欠	口	11.0	高	5.4	白//	外面は３条の縦線３組で区切った中に笹状文を３方に配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に不明文様。呉須は酸化コバルト。	近代。
				底	3.9					
15	第10図 PL.8	瀬戸・美濃 磁器か 端反碗	2区埋門中段 1/2	口	10.6	高	5.7	白//	外面は３条の縦線３組で区切った中に笹状文を３方に配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に崩れた「寿」字文。呉須は酸化コバルト。	近代。
				底	3.6					
16	第10図 PL.8	瀬戸・美濃 磁器か 端反碗	2区埋門中段 口縁部から体部 1/2欠	口	10.6	高	5.6	白//	外面は３条の縦線３組で区切った中に笹状文を３方に配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に崩れた「寿」字文。呉須は酸化コバルト。	近代。
				底	4.0					
17	第10図 PL.8	瀬戸・美濃 磁器 端反碗	2区埋門中段 口縁部1/4欠	口	10.3～10.7	高	5.5～5.7	白//	外面は３条の縦線３組で区切った中に笹状文を３方に配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に崩れた「寿」字文。高台内に吹き墨状に呉須を飛ばす。呉須は酸化コバルト。口縁端部１部溶着痕。	近代。
				底	4.2					
18	第10図 PL.8	瀬戸・美濃 磁器 端反碗	2区埋門中段 口縁部から体部 1/2欠	口	10.9	高	5.5	白//	底部器壁は薄い。外面は３条の縦線３組で区切った中に笹状文を３方に配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に崩れた「寿」字文。	近代。
				底	4.1					
19	第10図 PL.8	瀬戸・美濃 磁器か 端反碗	2区埋門中段 口縁部一部欠	口	11.0	高	5.6	灰白//	外面は３条の縦線３組で区切った中に笹状文を３方に配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に不明文様。呉須は酸化コバルト。	焼成不良。近代。
				底	4.0					
20	第10図 PL.9	瀬戸・美濃 磁器か 端反碗	2区埋門中段 口縁部1/4欠	口	10.6～11.0	高	5.8	白//	外面は３条の縦線３組で区切った中に笹状文を３方に配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に崩れた「寿」字文。	近代。
				底	4.1					
21	第10図 PL.9	瀬戸・美濃 磁器か 端反碗	2区埋門中段 口縁部一部欠	口	10.7	高	5.6	灰白//	秋草状文を７カ所配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に崩れた「寿」字文。呉須は酸化コバルト。素地は白くなく、不規則な貫入が入る。	焼成不良。近代。
				底	4.0					

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
22	第10図 PL.8	瀬戸・美濃 磁器か 端反碗	2区埋門中段 口縁部一部欠	口	11.0	高	5.5	白//	外面に秋草状文を７カ所配し、高台脇に井桁状と帆掛け船状文を２カ所づつ配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に崩れた「寿」字文。呉須は酸化コバルト。不規則な貫入が入る。	やや焼成不良。近代。
				底	4.2					
23	第10図 PL.9	瀬戸・美濃 磁器か 端反碗	2区埋門中段 口縁部一部欠	口	10.2～10.5	高	5.2	白//	秋草状文を７カ所配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に崩れた「寿」字文。呉須は酸化コバルト。	近代。
				底	3.9					
24	第10図 PL.9	瀬戸・美濃 磁器か 端反碗	2区埋門中段 口縁部1/2欠	口	10.4	高	5.9	白//	口縁部歪む。秋草状文を７カ所配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に崩れた「寿」字文。呉須は酸化コバルト。	近代。
				底	4.0					
25	第10図 PL.8	瀬戸・美濃 磁器 端反碗	2区埋門中段 口縁部1/2欠	口	10.7～11.0	高	5.2～5.4	白//	高台脇に歪みがあり、口縁部が傾く。外面に秋草状文を７カ所配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に崩れた「寿」字文。呉須は酸化コバルト。	近代。
				底	4.0					
26	第11図 PL.9	瀬戸・美濃 磁器か 端反碗	2区埋門中段 口縁部一欠	口	10.2～11.1	高	5.0～5.3	白//	口縁部歪む。外面に秋草状文を７カ所配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に崩れた「寿」字文。呉須は酸化コバルト。	近代。
				底	3.8					
27	第11図 PL.9	瀬戸・美濃 磁器か 端反碗	2区埋門中段 口縁部1/3欠	口	10.6	高	5.4	灰白//	底部器壁薄い。外面に秋草状文を7カ所配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に崩れた「寿」字文。呉須は酸化コバルト。不規則な貫入が入る。	焼成不良。近代。近代。
				底	4.0					
28	第11図 PL.9	瀬戸・美濃 磁器か 端反碗	2区埋門中段 口縁部1/3欠	口	10.3	高	5.7	灰白//	外面に秋草状文を7カ所配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に崩れた「寿」字文。呉須は酸化コバルト。	やや焼成不良。近代。近代。
				底	4.0					
29	第11図 PL.9	瀬戸・美濃 磁器か 端反碗	2区埋門中段 口縁部1/4欠	口	(10.7)	高	5.4	白//	外面は簡略化した蔓草文か。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に不明文様。呉須は酸化コバルト。	近代。
				底	3.6					
30	第11図 PL.9	瀬戸・美濃 磁器か 端反碗	2区埋門中段 口縁部から体部1/4欠	口	10.7	高	5.3	白//	外面は簡略化した蔓草文か。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に不明文様。呉須は酸化コバルト。	近代。
				底	3.8					
31	第11図 PL.9	瀬戸・美濃 磁器 端反碗	2区埋門中段 口縁部一部欠	口	10.7	高	5.3	白//	外面は簡略化した蔓草文か。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は２重圏線内に不明文様。呉須は酸化コバルト。	近代。
				底	3.4					
32	第11図 PL.9	製作地不詳 磁器 端反碗	2区埋門中段 口縁部1/3欠	口	10.7	高	5.3～5.6	白//	外面は２条の縦線で３カ所に区切り、その中に唐草状文様を配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に不明文様。全面に貫入が入る。	やや焼成不良。近代。
				底	3.2					
33	第11図 PL.9	瀬戸・美濃 磁器か 端反碗	2区埋門中段 口縁部一欠	口	10.6	高	5.0	白//	底部器壁は薄い。外面は簡略化した唐草文で、蔓部分と花部分を３方に配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に崩れた「寿」字文。呉須は酸化コバルト。	近代。
				底	3.9					
34	第11図 PL.9	瀬戸・美濃 磁器か 端反碗	2区埋門中段 口縁部1/4欠	口	10.6	高	5.8	白//	外面は縦線地文内に６カ所の窓絵を配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は１重圏線内に不明文様。不規則な貫入が入る。	やや焼成不良。近代。
				底	3.6					
35	第11図 PL.9	瀬戸・美濃 磁器か 端反碗	2区埋門中段 口縁部1/3欠	口	12.6	高	6.0	白//	他の碗に比して口径大きい。外面は素描状の花文。口縁部内面はやや幅広の簡略化した文様帯。底部内面は２重圏線内に崩れた「寿」字文。	近代。
				底	4.1					
36	第11図 PL.—	製作地不詳 磁器 平碗	2区埋門中段 口縁部一部、底部1/2	口	(10.5)	高	3.9	白//	平碗。外面はクローム青磁にこげ茶色上絵具で施文。内面は花卉文を手描き。口錆。高台内１重圏線内に不明銘。釉はやや白濁。	やや焼成不良。近現代。
				底	(3.4)					
37	第11図 PL.9	瀬戸・美濃 磁器か 丼	2区埋門中段 口縁部3/4欠	口	(158.0)	高	7.1	白//	機械轆轤成形で器壁厚い。外面上半と口縁部内面に竹垣状文。	近現代。
				底	6.4					
38	第12図 PL.10	瀬戸・美濃 磁器 皿	2区埋門中段 口縁部1/3欠	口	14.0	高	3.1～3.4	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。底部やや歪む。	近代。
				底	5.8					
39	第12図 PL.10	瀬戸・美濃 磁器 皿	2区埋門中段 口縁部1//4欠	口	13.9	高	3.1～3.3	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
				底	5.7					
40	第12図 PL.10	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/4欠	口	14.3	高	3.3	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
				底	6.0					
41	第12図 PL.10	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/3欠	口	14.1	高	3.4	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
				底	5.6					

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
42	第12図 PL.10	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/4欠	口 底	13.8 5.7	高	3.5	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。不規則な貫入が入る。	やや焼成不良。 近代。
43	第12図 PL.10	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/4欠	口 底	14.0 ～ 14.2 6.4	高	3.6～ 3.8	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
44	第12図 PL.10	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/4欠	口 底	13.9 6.2	高	3.3～ 3.5	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
45	第12図 PL.10	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/4欠	口 底	13.6 5.7	高	3.4	白//	器壁は薄い。口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
46	第12図 PL.10	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部一部欠	口 底	14.0 5.9	高	3.3	白//	器壁は薄い。口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
47	第13図 PL.11	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/4欠	口 底	14.0 5.0	高	3.7	白//	器壁はやや薄い。高台径は小さい。口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
48	第13図 PL.11	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/3欠	口 底	13.8 6.0	高	3.2	白//	器壁は薄い。口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
49	第13図 PL.11	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/4欠	口 底	13.5 5.6	高	3.2	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。不規則な貫入が入る。	やや焼成不良。 近代。
50	第13図 PL.11	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/4欠	口 底	13.5 5.6	高	3.4	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
51	第13図 PL.11	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/4欠	口 底	13.4 5.7	高	3.2	白//	器壁はやや薄い。高台径は小さい。口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。不規則な貫入が入る。	やや焼成不良。 近代。
52	第13図 PL.11	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/4欠	口 底	14.0 5.4	高	3.7	白//	体部は外反。口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
53	第13図 PL.11	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部一部欠	口 底	14.3 6.0	高	3.5	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
54	第13図 PL.11	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/4欠	口 底	13.9 5.7	高	3.1	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
55	第13図 PL.11	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部一部欠	口 底	13.7 6.2	高	3.0	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
56	第14図 PL.12	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部一部欠	口 底	14.0 6.0	高	3.2	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
57	第14図 PL.12	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/4欠	口 底	14.2 6.4	高	3.6	灰白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	やや焼成不良。 近代。

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
58	第14図 PL.12	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/3欠	口	13.6	高	3.5	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
				底	6.0					
59	第14図 PL.12	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/2欠	口	14.1	高	3.6	灰白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	焼成不良。近代。
				底	6.1					
60	第14図 PL.12	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/2欠	口	13.7	高	3.5	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。不規則な貫入が入る。	やや焼成不良。近代。
				底	5.5					
61	第14図 PL.12	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/3欠	口	13.9	高	3.1	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。底部付近の釉が白濁する。	やや焼成不良。近代。
				底	5.7					
62	第14図 PL.14	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/4欠	口	13.6	高	3.3	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
				底	5.7					
63	第14図 PL.12	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/4欠	口	13.4	高	3.2	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。細かい貫入が入る。	やや焼成不良。近代。
				底	5.9					
64	第14図 PL.12	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/3欠	口	13.9	高	3.2	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
				底	5.8					
65	第15図 PL.12	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/4欠	口	14.1	高	3.2	灰白//	器壁薄い。口縁部内面に１条､底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	やや焼成不良。近代。
				底	6.0					
66	第15図 PL.13	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/4欠	口	13.9	高	3.4	灰白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。釉は全体に白濁する。	焼成不良。近代。
				底	5.6					
67	第15図 PL.14	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部2/3欠	口	(13.8)	高	3.4～3.7	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
				底	5.7					
68	第15図 PL.13	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/2欠	口	13.6	高	3.6	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
				底	5.8					
69	第15図 PL.13	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部3/4欠	口	(13.7)	高	3.2～3.5	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
				底	5.4					
70	第15図 PL.13	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/2欠	口	13.8	高	3.2	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。不規則な貫入が入る。	やや焼成不良。近代。
				底	5.6					
71	第15図 PL.13	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/2欠	口	14.0	高	3.8	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。釉がわずかに白濁。	やや焼成不良。近代。
				底	5.5					
72	第15図 PL.13	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/2欠	口	14.0	高	3.6	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。釉がわずかに白濁。	やや焼成不良。近代。
				底	6.3					

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
73	第15図 PL.13	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部一部欠	口	13.6	高	3.7	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。不規則な貫入が入る。	やや焼成不良。近代。
				底	5.8					
74	第16図 PL.13	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/3欠	口	13.1	高	3.4	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。不規則な貫入が入る。高台内中央と高台脇はピンク色を帯びる。	やや焼成不良。近代。
				底	5.7					
75	第16図 PL.13	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部一部欠	口	13.8	高	3.7	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。不規則な貫入が入る。高台内中央と高台脇はピンク色を帯びる。	やや焼成不良。近代。
				底	5.8					
76	第16図 PL.14	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/2欠	口	14.4	高	3.5	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。不規則な貫入が入る。磁器は磁化不十分。	焼成不良。近代。
				底	6.2					
77	第16図 PL.14	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部2/3欠	口	14.2	高	3.5	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。不規則な貫入が入る。磁器は磁化不十分。	焼成不良。近代。
				底	6.0					
78	第16図 PL.14	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部一部欠	口	14.2	高	3.7	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。不規則な貫入が入る。磁器は磁化不十分。	焼成不良。近代。
				底	6.2					
79	第16図 PL.14	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/3欠	口	13.8	高	3.5	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
				底	5.2					
80	第16図 PL.14	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/3欠	口	14.2	高	3.7	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。不規則な貫入が入る。	やや焼成不良。近代。
				底	6.0					
81	第16図 PL.14	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/4欠	口	14.1	高	3.6	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。不規則な貫入が入る。	やや焼成不良。近代。
				底	5.6					
82	第16図 PL.14	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/4欠	口	14.0	高	3.5	白//	口縁部内面に１条、底部内面周縁に２条の圏線を施し、圏線間の３方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を１本、濃みの間に３本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。不規則な貫入が入る。	やや焼成不良。近代。
				底	5.6					
83	第17図 PL.—	瀬戸・美濃 陶器 皿	2区埋門中段 底部	口	—	高	—	淡黄//	高台内面をのぞき白土刷毛塗り。高台端部を除き灰釉。	19世紀中頃か。
				底	6.8					
84	第17図 PL.15	瀬戸・美濃 陶器 皿	2区埋門中段 1/3欠	口	11.6	高	1.3	灰白//	灰釉施釉後に底部外面を拭う。相対する口縁部に銅緑釉。銅緑釉をかけない部分は口錆。底部内面鉄絵具による施文。灰釉には貫入が入る。	近現代。
				底	—					
85	第17図 PL.14	製作地不詳 磁器 皿	2区埋門中段 口縁部1/5欠	口	14.0	高	3.6	白//	口錆。底部内面は型で文様を押し、文様部に濃みを入れる。底部内面周縁は２重圏線。	近代。
				底	5.8					
86	第17図 PL.15	製作地不詳 磁器 白磁皿	2区埋門中段 口縁部2/3欠	口	(14.5)	高	2.7	白//	体部は立ち上がり、口縁部は外反。口縁部はリム状をなす。底部内面は型で龍を描く。	近代。
				底	8.0					
87	第17図 PL.15	製作地不詳 陶器 洋皿	2区埋門中段 口縁部1/4、底部1/2	口	(23.4)	高	1.8	白//	リム型ディナー皿。縁とリム部に赤色絵具による圏線。底部内面に赤上絵具による「大学」字。高台内に「EAGLE RAND」銘と王冠をかぶった鷹マークの下絵。細かい貫入が入る。	硬質陶器か。近現代。
				底	13.3					
88	第17図 PL.15	製作地不詳 陶器 行平か鍋蓋	2区埋門中段 口縁部2/3欠	口	16.8	高	3.8	灰白//	口縁下部を除く内面に錆色の鉄釉。つまみ周囲と天井部周縁に錆色の鉄釉。天井部外面の釉間に飛び鉋。つまみ内に「第一中隊曹長室用」、口縁下部に「○○中隊曹長室○」の墨書。	近代。
				つまみ	3.9					

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
89	第17図 PL.15	製作地不詳 陶器 土瓶	2区埋門下段 1/4	口 底	― (9.4)	高	―	灰白//	外面は底部を除き灰釉。体部正面には円形に白土をかけ、白土上に呉須と緑下絵具で施文。	近現代。
90	第18図 PL.―	瓦 軒丸	2区埋門中段 一部	口 底		高		暗灰//	断面は灰白色、器表は暗灰色。瓦頭面は珠点内に巴文であろう。珠点内に圏線巡るか。	
91	第18図 PL.―	瓦 桟瓦か	2区埋門中段 一部	厚	1.9			暗灰//	断面は灰白色、器表は暗灰色。上面にはキラ付着。端部に押印。	
92	第18図 PL.15	瓦 軒丸	2区堀 瓦頭面	径 厚	13.4 2.3			暗灰//	断面は灰白色、器表は暗灰色。瓦頭面は珠点内に１重圏、圏線内に巴文。	
93	第18図 PL.15	瓦 不詳	2区堀 一部	厚	2.5			灰//	１面に幅８㎜の凹線。残存する縁に半円形の抉り。	
94	第18図 PL.15	製作地不詳 磁器 丸碗	1区撹乱 1/4	口 底	(7.8) (3.8)	高	5.7	白//	口縁部外面と高台外面、高台内周縁は染付による細い圏線。外面圏線間、２重丸内「福」、「寿」字文を散らす。高台端部外面は斜めに削る。高台内周縁は１重圏線。呉須はやや黒味を帯びる。	近現代。
95	第18図 PL.―	磁器 白磁皿	3区堀 口縁部1/8、底部 1/4	口 底	(9.8) (5.0)	高	2.5	白//	腰部は稜をなし、口縁部は外反。内面は型による双喜文か。	近代。
96	第19図 PL.16	金属製品 煙管	一括	長 幅	13.0 1.0	高 重	0.8 9.8	//	火皿から吸い口までを金属で一体製作したキセルでらうにあたる部分を鉄さびが覆う。破損した端部でわずかに上向きに曲がり火皿につづくと見られる。らう部分の断面は横に広い楕円形で下側に接合あとが観察される。	
97	第19図 PL.16	鉄製品 釘	南側法面中断一括	長 幅	5.3 0.5	高 重	0.6 5.4	//	断面ほぼ正方形の釘と見られる鉄製品で緩やかにねじれるように曲がっている、頭部は角形で折り返し等は見られない、他端は劣化後破損。	
98	第19図 PL.16	鉄製品 釘	南側法面中断一括	長 幅	5.1 0.6	高 重	0.6 4.4	//	断面ほぼ正方形の釘と見られる鉄製品で緩やかに曲がっている、頭部に直交する形て錆化した木質が残存する、頭部は角形で折り返し等は見られない、他端は劣化後破損。	
99	第19図 PL.16	金属製品 不詳	一括	長 幅	5.4 5.9	高 重	0.4 12.9	//	断面ほぼ円形の輪で変形し一か所割れて開いているが、本来は輪状に綴じていたとみられる。	
100	第19図 PL.16	鉄製品 不詳	一括	長 幅	7.1 7.0	高 重	1.2 33.5	//	直径7㎝ほどの薄い鉄板周囲に高さ0.8㎝程の縁が立ち上がるがねじや固定用の孔の痕跡等は確認できない。	
101	第19図 PL.16	鉄製品 釘	一括	長 幅	11.6 6.7 0.5 0.4	高 重	0.5 0.4 14.5	//	角釘2本が交差した状態で錆付く、両方とも頭部分は見られず先端も残っていない。1本は端部でくの字に折れ曲がり破損する。	

１区現況（平成 25 年７月撮影）

２・３区現況（平成 25 年７月撮影）

第５章　調査の成果とまとめ

第１節　出土陶磁器

２区-①東側の区域から、陶磁器がまとまって出土した。梅ノ木郭南側にある堀をまたぐ埋門の、南側土台となる張出部の上位から出土したもので、埋没土中からの出土である。出土層位からみると、埋門が機能していた時代のものではなく、堀を埋めたころのものと推定される。これらの陶磁器について、下記のように、当事業団大西雅広の所見がえられた。

今回の調査地点は、高崎城梅ノ木郭堀の埋門があった場所である。しかし、出土遺物のほとんどは埋土中から出土した近代陶磁器である。調査面積に比して出土量は多く、中でも磁器碗と皿は接合率が高く文様も揃っており、多くは一括購入･一括廃棄されたものと推測される。高崎市教育委員会が隣接地で行った梅ノ木郭堀の調査でも「石炭ガラを主体とする層があって、この層に限って狭い範囲内に陶磁器や瓦片が多く含まれていた」。また、磁器に「型紙摺や銅板転写の製品は出土していない」ことや、「士官会食所」の墨書から十五連隊創設以前の鎮台兵舎で使用された食器類と推定している(1)。

堀から出土した陶磁器で器形・文様ともに揃っているのは磁器の碗と皿である。図示可能な陶磁器はすべて図示しているので、掲載比率は出土比率に近い。碗は明らかな混入である湯飲み(第９図１)を除き、図示したのは35点である。35点のうち端反碗が29点、丸碗が４点、平碗が１点(第11図36)、不明碗１点(第９図６)である。これらのうち、平碗と不明碗の各１点は残存率が低く、一括廃棄品ではない可能性がある。丸碗は２重円内に「福」、「寿」を染付した２点(第９図２・３)と上絵具で「大学」と記した２点(第９図４・５)がある。共に残存率が高いが、呉須の発色と絵付けが端反碗と異なる。また、第９図４の文字は輪郭が濃く中央が薄いことから、ゴム印版上絵の可能性がある。このため、丸碗４点が端反碗に伴うとは言い切れない。また、２重円内に「福」、「寿」を染付けた丸碗(第18図94)は堀以外の場所からも出土している。

端反碗はやや大ぶりの第11図35を除き、酸化コバルトを用いたと考えられる手描き染付である。第９図11から第10図20の10点はほぼ同文様である。秋草状の文様を施した端反碗は８点(第10図21～第11図28)出土している。これら以外は数が少なく、第11図29から31の３点、第９図９・10の２点が同文様で、他は各１点である。

皿は、内面文様が同様な手描き染付が45点(第12図38～第16図82)出土しており、いずれも酸化コバルトを用いたと考えられる。これらのうち10点(第15図73～第16図82)は外面無文である。個々に器厚や器形、文様に多少の違いはあるものの、数が多いうえに残存率が高く一括性が高いと考えられ、端反碗同様、一括購入・一括廃棄されたと推測される。洋皿(第17図87)は、文字から丸碗(第９図４・５)と同時期と考えられるが、端反碗に伴うか否かは不明である。

東京および周辺の消費地遺跡一括資料における中型碗は長佐古氏によりフェーズⅠからフェーズⅤの５段階区分がなされている(2・3)。堀中段から出土した磁器中型碗はすべて染付文様が手描きのＡ類(端反形碗)で、１点を除いて人工のコバルトを用いていると考えられる。また、型紙刷が認められないことから、フェーズⅠに相当すると考えられる。フェーズⅠの年代観は明治一桁年代後半～十年代中頃と推定されている。

高崎城跡地は明治４年に県庁が置かれ、翌５年兵部省の管轄下となった後、陸軍省に引き継がれ、東京鎮台下の兵営として整備されていった。その後、明治17年に東京鎮台高崎分営は廃止され、歩兵第十五連隊が置かれている(4)。この年代は先のフェーズⅠの年代とほぼ一致し、磁器碗や皿と共に出土した行平か鍋の蓋に「第一中隊曹長室用」の墨書が認められること。また、東京鎮台高崎分営は本丸内に置かれていたこと、調査地点は歩兵第十五連隊時には兵舎と兵舎の間にあたり、連隊期には

埋め立てられていた可能性が高いことなどから、出土した陶磁器の多くは東京鎮台高崎分営設置時に一括購入され、歩兵第十五連隊創設に伴う埋め立て時に一括廃棄されたものと推定される。

注
１．高崎市教育委員会『高崎城Ⅶ・Ⅸ　高崎城三ノ丸遺跡』1994　62・305頁
梅ノ木郭堀からは同文様の磁器端反碗と皿が出土している。また、SD７出土近代陶磁中にも同文様の磁器端反碗と皿が認められる。SD７出土近代陶磁の廃棄が一時期か二時期以上かは不明であるが、購入時期が二時期以上である可能性もある。
２．長佐古真也「続・お茶碗考　－近代・現代の中形碗に飯碗を探る－」『考古学が語る日本の近現代』ものが語る歴史 14　同成社　2007　176～178頁
３．長佐古真也「消費地から見た瀬戸・美濃窯－ご飯茶碗を中心に－」『瀬戸・美濃窯の近代－生産と流通－　シンポジウム資料集』公益財団法人瀬戸市文化振興財団2012　21・22頁
４．清水吉二「十五連隊の高崎設置」『新編 高崎市史 通史編４』高崎市2004　110～115頁

第２節　埋門

２区-①東側の区域で検出した遺構は、梅ノ木郭南側にある堀の南岸側の土台(いわば橋台)となる張出部に相当するように思える。以下、絵図等を参照してみたい。

第20図は高崎市教育委員会が製作したもので、高崎城の施設の位置を現代地図に重ねたものである(元図はカラー)。本丸東側の槻木門(つきのきもん)を通ると梅ノ木郭に至る。梅ノ木郭の北側に梅木門があり、これを通ると二の丸に出る。梅木門の反対側(南側)に埋門が位置する。

第21図は享保12年(1727年)の絵図で、高崎市教育委員会の整理により「No.17　御城破損之場所御願絵図」とよばれるもので、その一部を示した。全体に立体的な表現になっており、「埋門」文字の南側の土塁をくぐる門があり、門を通って南側に出ると構造物が描かれている。その南側に梯子状の施設が水没したように描かれている。門自体は判然としないが、土塁の覆いの下に存在するのであろう。堀の南側からも梯子状の施設が北へ延び、両者の間は堀の水が描かれている。

第22図は享保６年(1721年)に遡るが、「No.40　チリ防木こく今度植候所絵図上ル控」と呼ばれる絵図で、梅ノ木郭南側の堀が描かれ、南北に立体的表現の張出部があって、そこから梯子状の施設が水没したように描かれている。引出線の先に「橋キワ三尺ずつ杉木コクアリ」と注記されている(木コク=「からたち」のことらしい)。

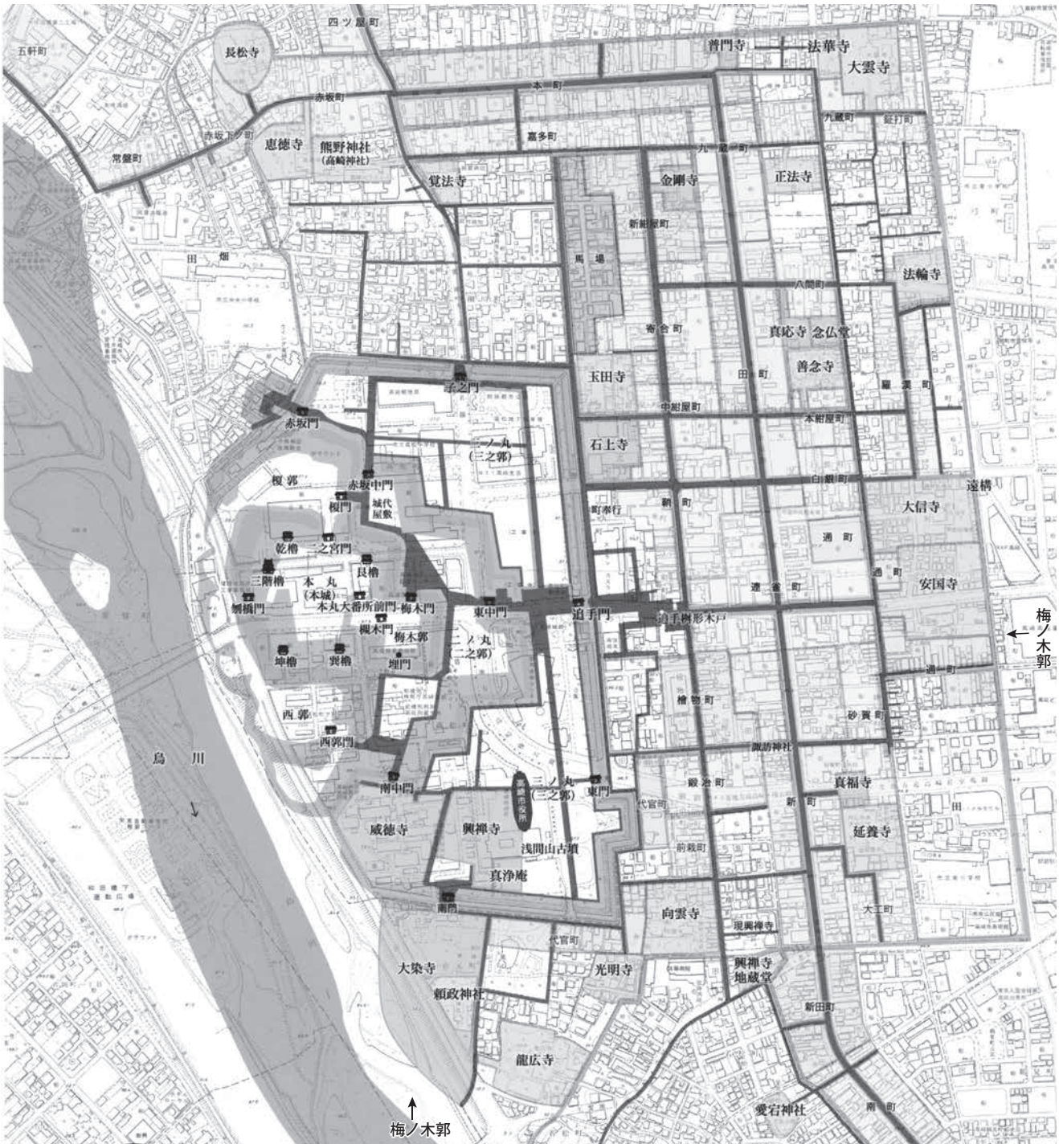
解説によると、埋門は「桁行１間２尺３寸、梁間２間の小さな門」とされ、「土居と同じように土を盛ってあった」という。つまり土塁のように土を積み上げたところにトンネル状の空間があり、ここに門が設置されていたと推定され、これを「埋門」と呼んだのであろう。南側土塁北辺に隅切りが描かれていることから、ここが「埋門」の位置と考えられる。南北の堀に水没する梯子状の施設は、片側が土台に固定されて、他端が水面下にあり、通常時は渡ることのできない橋状の施設である(２区で検出した堀中の杭は先端部を支えた杭か)。この施設の上に、せり出す橋板を渡せば、水上を通行することができる。あるいは水没する他端を跳ね橋のように持ち上げて利用するものか。日常的には梅ノ木門から出入するのであろう。

第23図は明治18年の高崎城の様子を示す地図で、『第一軍管地方迅速測図』のなかの「高崎」の一部である。図左肩に「明治十八年測量同廿一年製版同年六月廿九日出版」と記入されている。その図に現裁判所建物を加筆してみたところ、標高点らしき「104,9」の文字の「10」の南側に相当するらしいことが判った。縮尺約１/１万で、誤差を含んでいる。本丸北側に「練兵場　高崎分営」と記入されており、すでに軍事施設として利用されていることが判る。また、本丸北辺の土塁がほぼ直線的に東へ延びて描かれ、土塁の南側に建物が散在している。本丸南側の堀は描かれているが、東側の堀は描かれていないことから、この時点で梅ノ木郭を囲む堀、二の丸北東部を囲む堀は、埋められていたと推定される。このことと、出土陶磁器の観察・編年観を併せると、出土陶磁器は明治18年以前の流通品で、堀を埋めたときに投げ込まれたものか、後日、ゴミ穴に埋められたものと考えられる。

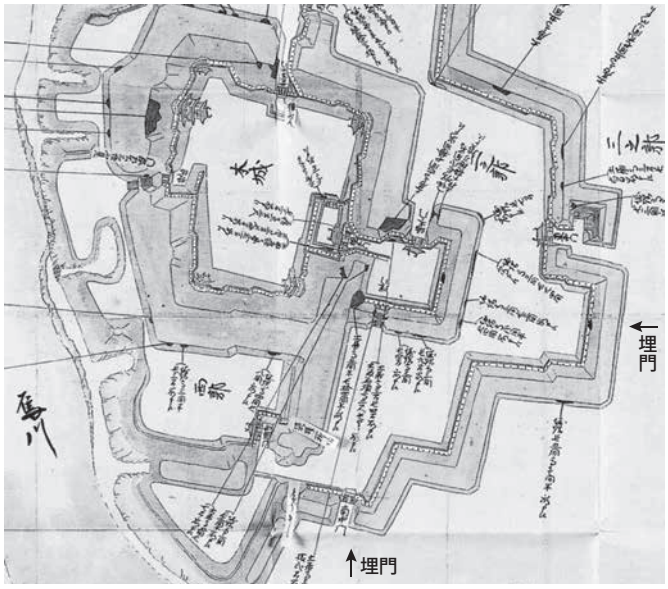
第24図は高崎城第10次調査の調査区域を、同報告書から引用したものである。裁判所建物の北側に新しい建物を建設するため、その事前の調査が平成３年(1991年)に実施された。この調査では、中世の石組み遺構と池状遺構のほか、溝・井戸・土坑が発見され、高崎城以前の中世和田城にかかわる遺構と考えられている。また、この地点での近世の遺構は、瓦を一括投棄した穴である。し

たがって、近世の遺構は、梅ノ木郭の構造に直接かかわる遺構ではないように思える。

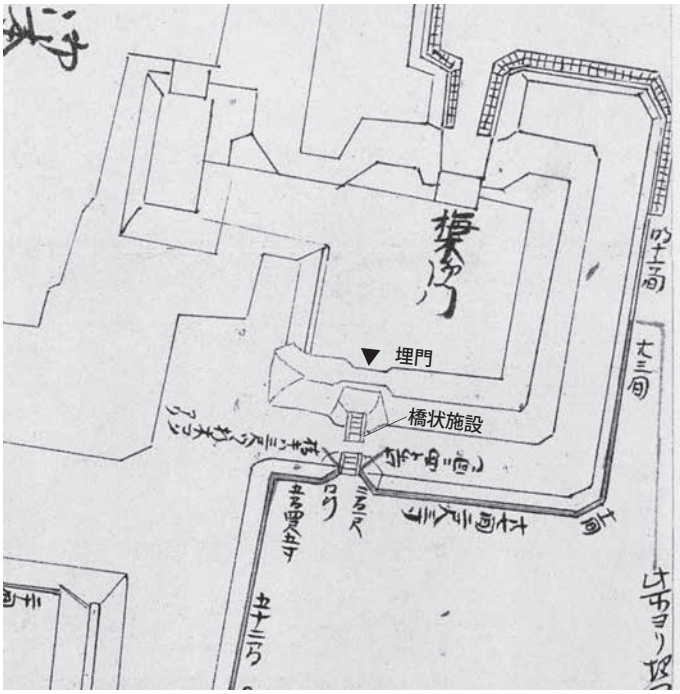
以上のように、江戸時代の絵図、近代の地図、現代の調査履歴からみると、今回の調査で検出した遺構は「埋門」そのものではなく、江戸時代の絵図に描かれた埋門の近くに位置する、埋門南側の堀の南岸にある土台（橋台相当）を検出したとみられ、梅ノ木郭の一部を明らかにしたと考えられる。



第20図　高崎城　梅ノ木郭の位置　『高崎市史資料集１　高崎城絵図』平成18（2006）年、１頁に加筆

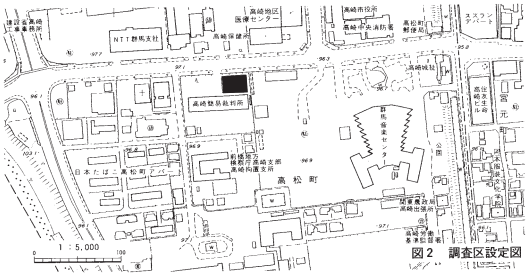


第21図　高崎城　梅ノ木郭　埋門の位置（１）
「No.17　御城破損之場所御願絵図」享保12年９月
『高崎市史資料集１　高崎城絵図』平成18(2006)年、17頁の一部に加筆。



第22図　高崎城　梅ノ木郭　埋門の位置（２）
「No.40　チリ防木こく今度植候所絵図上ル控」享保６年９月27日
『高崎市史資料集１　高崎城絵図』平成18(2006)年、45頁の一部に加筆。▼埋門の位置。

第23図　明治18年の高崎城跡
『第一軍管地方迅速測図』「高崎」の一部に加筆。
■前橋地家裁高崎支部の推定位置。



第24図　高崎城第10次調査の調査区域
『高崎城Ｘ　高崎城梅ノ木郭遺跡』高崎市遺跡調査会、1993、10頁に加筆。■第10次調査の位置

写 真 図 版

1区全景　北から

1区全景　東から

1区全景　北から

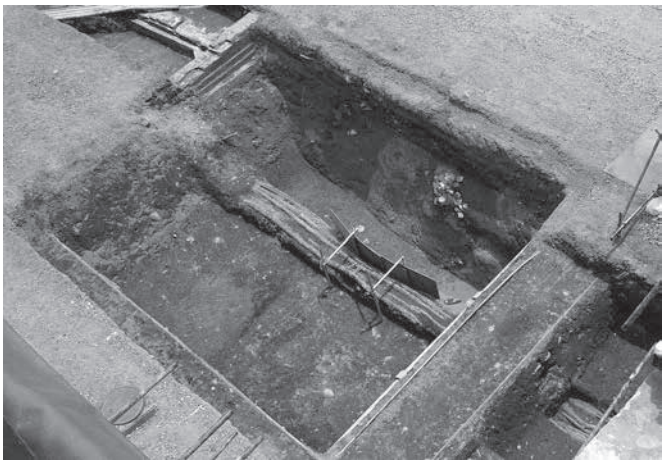
1区　基本土層断面a-b　南から

2区-①全景　北から

2区-①西側全景　西から

2区-①東側全景　東から

２区-①西側堀内　西壁基本土層断面a-b　東から



２区-①東側　北西から

２区-①東側堀内　土層断面g-h　東から

２区-①東側埋門南堀上層　遺物出土状態　北から

２区-②煉瓦とコンクリートの基礎１　東から

２区-②煉瓦とコンクリートの基礎２　西から

２区-①東側　梅ノ木郭埋門南堀南側　北から

２区-①東側　梅ノ木郭埋門南堀南側　北東から

２区-①東側　梅ノ木郭埋門南堀南側　北西から

２区-①　北壁基本土層断面c-d　南から

２区-②トレンチ　西から

２区-①東側　梅ノ木郭埋門南堀　北東から

２区-②トレンチ　南壁基本土層断面e-f　北から

２区-①東側　梅ノ木郭埋門南堀１　北から

２区-①東側　梅ノ木郭埋門南堀２　北から

２区-①東側掘削底面　杭出土状態　東から

２区-①東側　木杭・石出土状態　東から

３区全景　東上空から

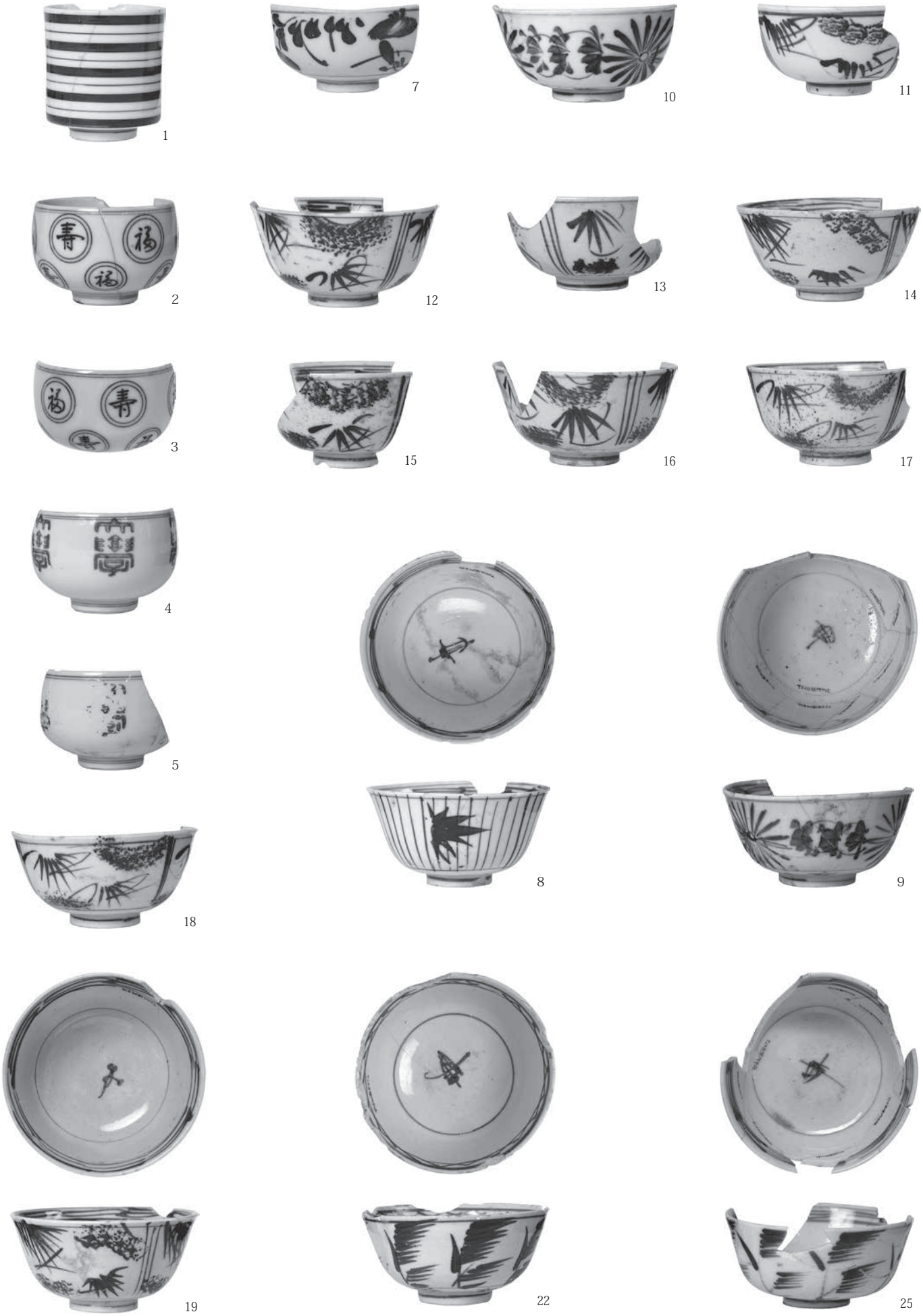
３区全景　西上空から

３区全景　東から

３区全景　西から

３区全景　北から

３区　西壁土層断面c-d　東から


1
7
10
11
2
12
13
14
3
15
16
17
4
5
8
9
18
19
22
25

20

21

23

24

26

27

28

29

30

31

32

33

37

34

35

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

49

50

51

52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

63

64

65

66

68

69

70

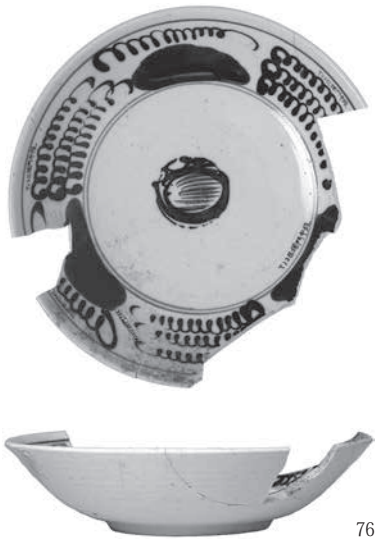
71

72

73

74

75


76

77

78

79

80

81

82

67

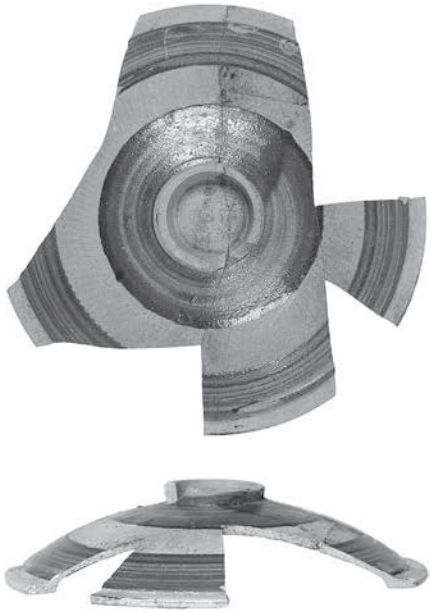
62

85

２区埋門南堀　出土遺物−８、１区出土遺物

84

86



88

89

92

87　部分

93

１区　出土遺物

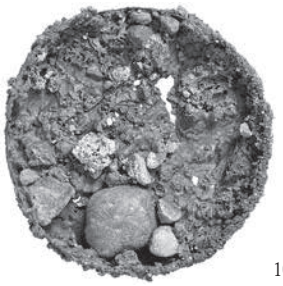
94

96

97

98

99



100

102

101

報告書抄録

書名ふりがな	たかさきじょういせき21
書名	高崎城遺跡21
副書名	前橋地家裁高崎支部庁舎耐震改修等工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	574
編著者名	関　晴彦/坂口　一/大西雅広/関　邦一
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20130924
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	たかさきじょういせき
遺跡名	高崎城遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんたかさきしたかまつちょう
遺跡所在地	群馬県高崎市高松町26番地2
市町村コード	102020
遺跡番号	506
北緯(日本測地系)	361913
東経(日本測地系)	1390016
北緯(世界測地系)	361924
東経(世界測地系)	1390005
調査期間	20120501-20120531
調査面積	293㎡
調査原因	前橋地方家庭裁判所高崎支部庁舎耐震改修等工事
種別	城郭跡
主な時代	近世/近代
遺跡概要	近世-門跡1+堀跡1/近代-陶磁器+金属製品+木杭
特記事項	江戸時代の城跡
要約	近世高崎城梅ノ木郭埋門の南堀及び南岸の一部を検出。幕末～明治初め頃の陶磁器が一括出土。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第574集

高 崎 城 遺 跡 21

前橋地家裁高崎支部庁舎耐震改修等工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成25(2013)年9月17日　印刷
平成25(2013)年9月24日　発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555　群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
電話(0279)52-2511(代表)
ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/

印刷／ジャーナル印刷株式会社